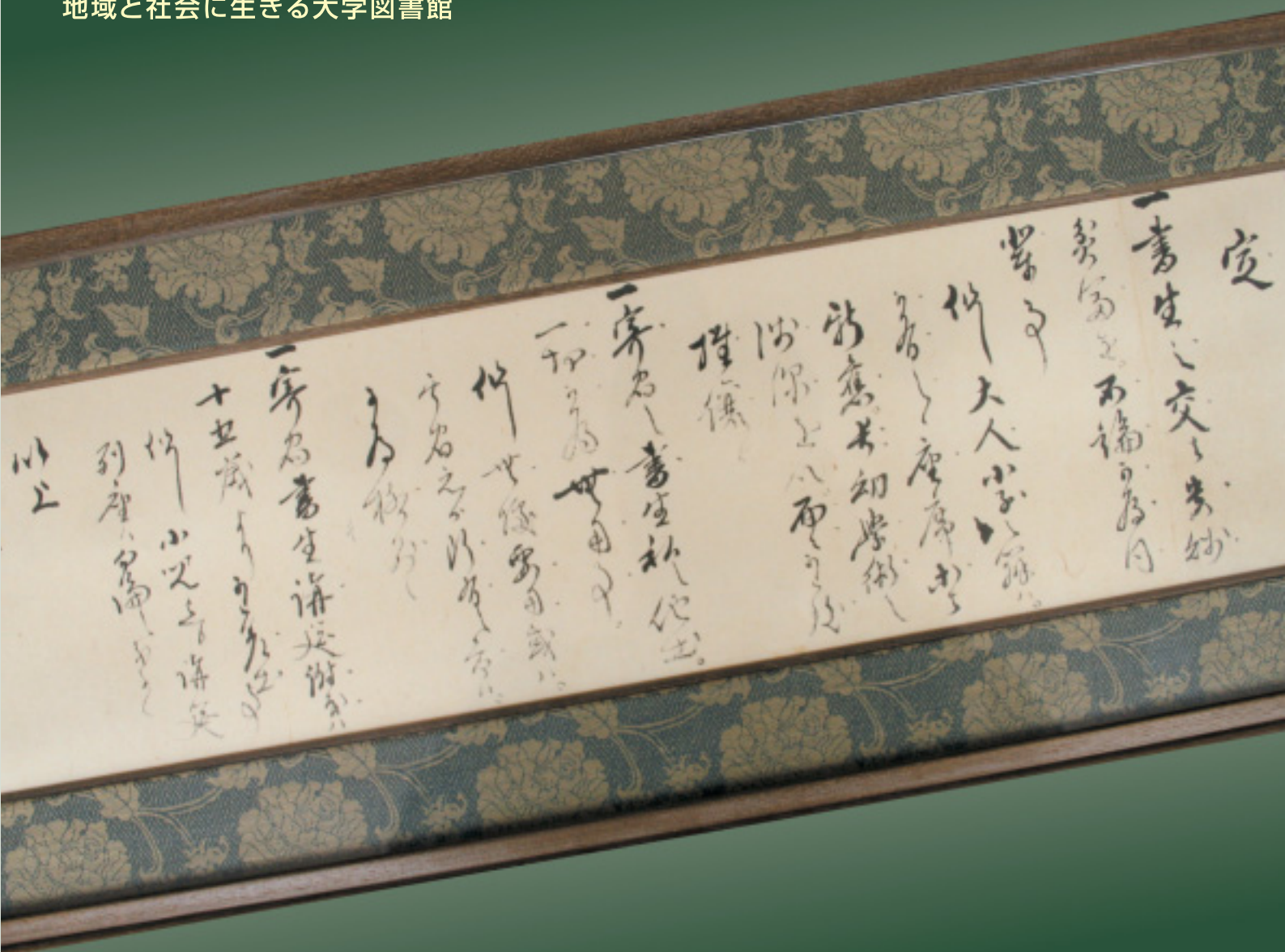


トピックス

大阪大学第1回男女共同参画シンポジウム 「多様な人材が活きる大学をめざして」開催

クローズアップ

地域と社会に生きる大学図書館



目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
キャンパスニュース	19
ナウススペシャル	36
表 彰 等	40
人 事	44
訃 報	47
インフォメーション	50
クラブ&サークル	53
インタビュー	54
留 学 生	56
交流協定大学	58
ガイドマップ	59
トピックス	60



表 紙：懷徳堂定書（総長室）

宝暦8年（1758）、懷徳堂の学寮に掲示された定書。その第1条には「書生の交わりは、貴賤貧富を論ぜず、同輩たるべきこと」と記されており、封建的身分秩序に掬われない、開明的な懷徳堂精神を、最もよく表現している。

表紙デザイン：株式会社ココティエ

大阪大学第1回男女共同参画

多様な人材活用推進委員会（委員長：沖田知子言語文化研究科教授）及び女性研究者キャリア・デザインラボは、1月25日(金)、コンベンションセンターにおいて、大阪大学第1回男女共同参画シンポジウム「多様な人材が活躍する大学をめざして」を開催しました。

本シンポジウムは、平成19年度科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」プログラムのキックオフシンポジウムとして行われたものです。本学の教職員、学生はもとより、他大学や研究所、民間企業などの男女共同参画担当者など、150名を超える参加がありました。

第Ⅰ部では、美宅成樹名古屋大学工学研究科教授を講師としてお招きし、「学協会の活動から見えるもの」と題して、男女共同参画学協会連絡会第5期委員長を務められた経験と大規模アンケートの調査結果に基づいた講演を行っていただき、その後、沖田委員長が「大阪大学の多様性を求めて」と題して、本学の提案課題である「次世代に繋ぐ女性研究者サポート連鎖の形成」事業の概要について報告を行いました。

引き続いて行われた第Ⅱ部では、同じく講師としてお招きした、遠山敦子新国立劇場運営財団理事長（元文部科学大臣）が、「道を拓いて歩む」と題して、文部省（当時）初の女性キャリアとして入省してから、文部科学大臣として国立大学法人化を実現するまでの約40年間にわたる霞ヶ関での日々を振り返るとともに、その経験を通じて得た「仕事と自分」についての考えを述べられました。

最後に、遠山理事長、美宅教授、沖田教授に加えて、田島節子同委員会委員（理学研究科教授）の4人によるパネルディスカッションが、堂目卓生同委員会委員（経済学研究科教授）の司会により行われました。仕事と家庭生活のバランスやポジティブ・アクションなどについて、会場から積極的な意見、質問が出され、盛況のうちに幕を閉じました。

シンポジウム「多様な人材が活躍する大学をめざして」開催



講演を行う遠山理事長



講演を行う美宅教授



パネルディスカッション（左から堂目教授、田島教授、沖田教授、遠山理事長、美宅教授）

地域と社会に生きる大学図書館



大阪大学附属図書館

大阪大学は大きく3つのキャンパスに分かれています。キャンパス毎に大学図書館があります。豊中キャンパスには中央図書館でもある「本館」、吹田キャンパスには「生命科学分館」と工学分野の「吹田分館」、また、箕面キャンパスには外国語関係分野の「箕面分館」があります。他にも部局や研究所の図書室があります。このような学内の図書館機能を持つ組織が連携して一つのライブラリーシステムを形成し、様々な図書館サービスを提供しています。大学全体としての蔵書数は390万冊を超え、国立大学では3番目の規模を誇ります。

附属図書館ではここ数年、入館・閲覧手続きの簡便化に始まり、卒業生や一般市民への図書の貸出とその範囲や条件の拡大など、毎年のように学外の方へのサービスを拡大しています。また、地域・社会と連携したイベント開催、貴重資料の電子化の推進と公開などのサービスを展開しています。図書館の地域・社会に対するサービスの現状と、最近の主な動きをご紹介します。

■ 大学図書館と社会貢献

社会への貢献は、大学図書館にとって古くて新しいテーマです。

「図書とは人類の記憶を保存する一種の社会的メカニズムであり、図書館はこれを生きている個人の意識に還元するこれまた社会的な一種の装置といえる。」今から75年ほど前にシカゴ大学の教授だったピアス・パトラーは、その著書の中でそう述べています。また、作家であるフアン・ゴイティソーロは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争について書いたルポルタージュの中で、サラエヴォ図書館が焼夷弾で破壊された行為を犯罪と定義し、「記憶殺し」という言葉を当てています。図書館が持つこうした「社会の記憶装置」としての機能は、ITが急速に発展している世の中においても大きく変わるものではないと考えられます。

大学図書館の学外の方へのサービスは、以前は文献複写や現物提供という形が主流でした。本学附属図書館においても、重要なサービスの一つとして、学外への資料・情報提供を行ってきました。特に生命科学分館は、前身の中之島分館時代から、全国の大学医学部、医学系研究機関、医療関係者に文献を提供しており、学外への文献提供数は日本一を誇っています（昭和52年には当時の文部省から「医学・生物学系外国雑誌センター館」に指定されました）。

こうした他の研究機関への情報提供に加えて、近年急速に比重を増してきているのが、地域社会をはじめとする学外の方への直接のサービスです。平成16年度の国立大学法人化後は特に、全国の国立大学が学外の方へのサービスや地域社会との連携、社会への貢献を大学図書館の業務として明確に位置づけ、重要な任務の一つとして掲げるようになりました。今の大学図書館は、社会全体の「知の宝庫」として機能することが求められているのです。

■ 地域・社会へ開かれた大学図書館

附属図書館は、以前から、本学の学生や教職員だけではなく、生涯学習等の支援のため、学外の方にも利用していただいています。2年前からは、豊中キャンパスにある本館や、吹田と箕面キャンパスにある3つの分館では学外の方への図書の貸出も始めました。希望される方には簡単な手続きで図書館利用者票を発行しており、平成18年度には約500名の方が利用され、2,000冊以上の貸出がありました。現在では800名ほどの方が利用されています。こうしたサービスの拡大に伴って学外の利用者数も毎年増加しており、平成18年度の入館者数は26,000名余りに達しました。この数は5年前に比べて約2倍になっています。

なお、図書館の利用について詳しいことは、図書館のホームページで紹介していますのでご覧ください。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/>



■ 学校教育との連携

附属図書館では、学校教育との連携の一環として、近隣の中学校で実施している職場体験学習の生徒を受け入れています。今年度も池田市立石橋中学校の生徒が、3日間にわたり図書館の図書や雑誌の受付、目録作成、貸出、複写サービスといった図書館の主な仕事を体験しました。図書館の舞台裏で、たくさんの資料を整理している様子を見て、普段、本を読んだり借りたりする図書館とは違った印象を持ったようです。

また、中学校や高校からの見学者へ図書館の案内をしています。今年度は17校、延べ約700名の方が図書館を訪れました。先生に引率された中高校生だけでなく、受験生の保護者の方々の見学も多く、途中で質問されるなど熱心な様子でした。



中学生による体験学習



受験生の保護者の方々も多く来館されます

■ 地域に開かれたイベント

毎年5月1日の本学創立記念日にあわせて開催される「いちよう祭」において、展示会と施設開放を実施しています。

「いちよう祭」での展示会は30年以上続いており、本学が所蔵する懷徳堂文庫、古地図、稀観本等の貴重資料を展示してきました。最近では図書館の活動を紹介する展示も行っています。平成19年度は、「図書館にはこんなに電子情報があつたんだ!!」というテーマで、朝日新聞データベースを例にした電子情報の説明や、附属図書館が提供する電子情報についてパネルを使って紹介し、約400名の来場者がありました。同時に開催している施設公開には、2日間で約1,600名の方が来館されました。

また、図書館では平成18年から年末に「クリスマス・コンサート」を開催しています。2回目となる平成19年は、「テルミンのタベ」と題して、サイバーメディアセンターの菊池誠教授によるテルミン演奏とミニレクチャーを開催し、約260名の参加者がありました。この催しに当たっては、近隣の公共図書館や駅にもポスターやちらしの配布について協力をお願いし、一般市民の方も多数来場されました。（詳細は「キャンパスニュース」30ページに掲載）



いちよう祭におけるパネル紹介



クリスマス・コンサートのポスター

■ 資料の電子化と公開

図書館では、インターネットを利用して、大学からの情報を社会に向けて発信しています。その主なコンテンツは2種類あり、一つは本学が所蔵する貴重資料を電子化したもの、もう一つは、本学の教育・研究活動の成果として生み出された論文などの学術情報です。

○ 貴重資料の電子化と公開

(1) 懷徳堂関係資料

本学の学問の源流である懷徳堂に関する資料で、1994年に発行された図録『懷徳堂—浪華の学問所』（懷徳堂友の会、懷徳堂記念会編集・発行）の掲載図版を電子化したものや懷徳堂関係者の著書、懷徳堂に関連のある当時の書物の画像を見ることができます。こうした資料は「電子展示で見る懷徳堂」として公開しています。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/tenji/kaitokudo/kaitoku.htm>



(2) 西洋古版アジア地図

西洋で発行されたアジア、特に東アジア・北アジアの地図約100点。発行年代は1570年代から1870年代まで300年にわたり、西洋人のアジア地理知識の変遷が伺えるものです。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/tenji/maps/maps.htm>



(3) 須田国太郎の能・狂言デッサン

わが国を代表する洋画家、須田国太郎画伯が、本業である洋画制作のかたわら、昭和2年から昭和32年までの間に、主として京都や大阪の能楽堂などにおける能や狂言の上演舞台を対象にしたデッサン約6千枚あまりのうち、大阪大学に寄贈された約5千枚を電子化したものです。デッサンそのものの美術的価値とともに近代、とりわけ昭和前期の能楽史の資料としての価値も高いものです。平成17年度には京都と東京の国立美術館で開催された「須田国太郎展」に一部を出展しました。

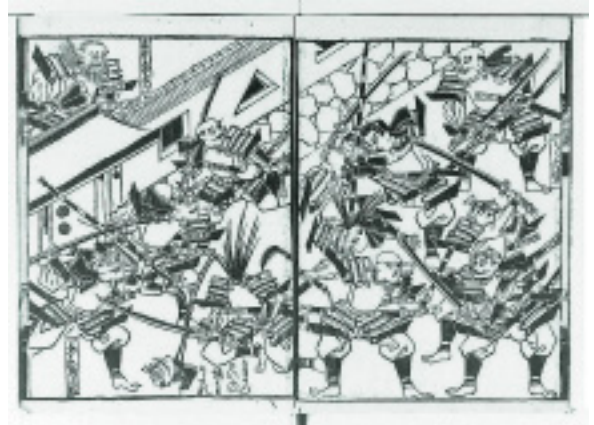
<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/e-rare/suda/>



(4) 赤木文庫

国文学者・横山重氏収集の「赤木文庫」のうち、江戸初期から中期にかけての古浄瑠璃及び説教正本96点に、信多純一教授から寄贈を受けた4点を加えた100点からなるコレクションです。刊年入り古浄瑠璃正図書の最古のものとして知られる「とうだいき」(寛永10年:1633年)をはじめ、他に現物が知られていない「天下の孤本」や保存状態の良好な美本が多く含まれています。

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/e-rare/akagi/akagi_collection.html



○ 教育研究活動成果の電子化・公開

本学の学術研究成果を公開するサービスの一つに「機関リポジトリ」があります。「機関リポジトリ」という言葉はあまり聞き慣れないかもしれませんが、大学などの学術機関が学術論文、学位論文、報告書、教材などの電子情報を保管して公開するサービスで、いわばインターネット上の電子書庫といったものです。「リポジトリ」というのは「知識の宝庫」という意味です。

このサービスは世界中の大学などで広がっており、現在、世界で約1,000、国内では70あまりの「機関リポジトリ」がサービスを提供しています。「機関リポジトリ」に保管された資料は、検索エンジンなどを使って調べることが可能で、本学の「機関リポジトリ」は「学術情報庫 OUKA (桜華(おうか))」という愛称で公開しています。

今年の1月30日と31日の両日にわたり、本学吹田キャンパスの銀杏会館で「機関リポジトリ」をテーマにした国際会議 DRFIC2008 を開催し、8カ国200名近い参加者が集まりました。

OUKA : <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/portal/>



■ 学生選書ツアー

学生の「こんな本が読みたい!」という要望に応える試みとして、学生選書ツアーを今年度から始めています。各学部の学生11名が参加した最初のツアーは、昨年の12月に紀伊國屋書店梅田本店で行われ、学生たちに選ばれた403冊の本が附属図書館の蔵書として加わりました。

この学生選書ツアーは、2008年2月9日(土)の朝日新聞夕刊でも取り上げられました。



(大阪大学附属図書館 図書館企画課)

役員室だより

2008.2 Vol.22

今年に入り寒さも平年並みとなり、2月には大阪市内でも何年かぶりのまとまった積雪がありました。年度末に向かう折、体調管理にはご留意下さい。

さて、平成20年度大学入試センター試験は、1月19日及び20日に本試験を、26日及び27日には追試験をそれぞれ無事、事故もなく実施することができました。また、1月28日から4日間にわたり概算要求のヒアリングを実施いたしました。

各部局長の先生方はじめ関係の皆様方にはご協力ありがとうございました。引き続き大学構成員の皆様のご支援をお願いいたします。

(驚 田 清 一)

各室の検討状況

総合計画室

学内措置による組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による組織整備として次の事項が認められました。

- ・薬学研究科附属創業教育センターの設置（平成20年3月1日）
- ・工学研究科附属高度人材育成センターの設置（平成20年4月1日）
- ・工学研究科附属超精密科学研究センターの研究部門制の導入（平成20年4月1日）
 - 新プロセス創成科学研究部門
 - 機能デザイン・計測科学研究部門
 - コアデバイス開発研究部門
- ・基礎工学研究科物質創成専攻の協力講座の設置（平成20年4月1日）
 - 量子物性科学講座
- ・基礎工学研究科システム創成専攻の協力講座の設置（平成20年4月1日）
 - 極限エレクトロニクス講座

同窓会連合会からのお知らせ

12月号で紹介いたしました会員向けサービスについて、現在、次のホテル等で優待割引が適用されます。（詳しくは連合会会員専用ホームページをご参照ください。）

また、同窓会連合会では、5月3日(土)のホームカミングデイ当日、レセプションで会員の方々対象に抽選会を企画しております。お誘い合わせの上、ご参加いただきますようお願いいたします。

ホテル等名	特 典 内 容	条 件
ホテル阪急エキスポパーク	1. レストラン 飲 食 代：総額20%割引（平日） 総額10%割引（休日・祝日） 2. 宿泊 部屋代定価：40%割引（平日） 20%割引（休前日）	レストランは10名様まで（本人含む） 精算前に会員証提示 他の割引との併用不可 適用除外日あり。
千里阪急ホテル	千里阪急直営店 飲食代金20%割引 ホテル内：「シャガール」、「三葉」、「ボナージュ」、「さくらうんじ」 阪大吹田キャンパス：「ラ・シェーナ」	会員本人と同伴3名まで 精算前に会員証提示 他の割引との併用不可
東急ホテルズ	東急ホテルズ（全国約50店舗） 宿泊割引（最大で30%の割引）	インターネット予約限定 ※会員専用ポータルサイトから東急ホテル の予約サイトへリンクしています。
大阪大学中之島センター	9階「交流サロン」 ①4名～9名のグループ利用で各人にグラスワイン1杯提供 ②10名以上のグループ利用でスパークリングワイン1本提供 ③20名以上のグループ利用で幹事1名料金無料 2階「スコラ」 ・貸し切りの場合、「交流サロン」の③と同様のサービス可	9階「交流サロン」 ・ディナー、ランチの場合 1名4,500円以上利用 ・パーティーの場合 1名5,000円以上利用 2階「スコラ」 ・ディナーの取扱いはありません。

施設整備等に係る各部局キャラバンを実施

「第2次国立大学等施設緊急整備5ヶ年計画」や施設マネジメント委員会の審議を踏まえた施設整備計画を効果的・効率的に推進していくためには、各部局と施設部が直接対話し、相互の意思疎通を図ることが必要であると考え、施設部長を隊長とするキャラバン隊を編成し、10月から12月にかけて各部局へのキャラバンを実施しました。

- 【目的】
- ・部局との直接対話により、意思疎通を図る。
 - ・顔の見える対応により、サービスの向上と迅速化・効率化を図る。
 - ・施設整備、営繕工事の計画的・効率的な実施に資する。

キャラバンの結果については、施設マネジメント委員会及び総合計画室会議に報告しました。本学における今後の施設整備に大いに役立てることとしておりますので、各部局におきましても今後ともご協力いただきますようお願いします。

フロンティア研究棟 2号館が竣工

このたび、工学研究科にフロンティア研究棟2号館（S4 1,230㎡）が完成し、去る12月14日（金）に竣工記念式典が執り行われました。

山本タミ子様のご寄附をもとに整備された2号館は、1号館のフレームを強調したデザイン理念を踏襲した外観とし、内部はフレキシブル性の高いラボ（実験系）と研究室（居室系）を機能的に配置しています。2号館では、材料学とその周辺分野の教育研究や、先端基礎研究をもとにした高度なもののづくりの発展をめざして、当初は、本年度採択されたグローバルCOEプログラム「構造・機能先進材料デザイン教育研究拠点」ならびに4社の鉄鋼共同研究講座などが利用します。



教育・情報室

大学院高度副プログラム

以前からお知らせしてきた大阪大学大学院高度副プログラムが、本年4月から以下の通り開始します。

平成20年度大阪大学大学院高度副プログラム一覧

プログラム名称	提案部局	連携部局	修了単位数	受講対象者	備考
まちづくりデザイン学	工学研究科	C S C D	8単位以上	M・D	
環境リスク管理学	工学研究科		8単位以上	M	
応用自然言語処理理論と技術	言語文化研究科		8単位以上	M・D	
グローバルリーダーシップ・プログラム	国際公共政策研究科		8単位以上	M・D	
ITSpiral	情報科学研究科		14単位以上	M1	
高度情報ネットワーク実践 スペシャリスト	情報科学研究科		8単位以上	M	
臨床医工学・情報学融合領域 の人材育成教育プログラム	臨床医工学融合研究 教育センター	工学・基礎工・医学 系・歯学・薬学・情 報・実践・C S C D	9単位以上	M・D	
コミュニケーションデザイン	コミュニケーション デザイン・センター	文学・人間	8単位以上	M・D	
金融・保険	金融・保険教育研究 センター	経済・理学・基礎工・ 情報	8科目以上	M・D	
ナノサイエンス・ナノテク ノロジー高度学際教育研究 訓練プログラム (博士前期課程高度学際教育)	ナノサイエンス・ナ ノテクノロジー研究 推進機構	理学・工学・基礎工・ 医学系・薬学・生命・ 産研・接合・超高圧・ 極限・太陽	9単位以上	M	
ナノサイエンス・ナノテク ノロジー高度学際教育研究 訓練プログラム (博士後期課程社会人特別選抜)	ナノサイエンス・ナ ノテクノロジー研究 推進機構	理学・工学・基礎工・ 医学系・薬学・生命・ 産研・接合・超高圧・ 極限・太陽	9単位以上	D	
サステイナビリティ学	サステイナビリティ・ サイエンス研究機構	人間・経済・工学	8単位以上	M	
ERASMUS MUNDUS 英語授 業・現代日本論	文学研究科		8単位以上	M・D	
医科学修士の健康医療問題 解決能力の涵養	医学系研究科		8単位以上	M	

平成20年度科目等履修生高度プログラム一覧

プログラム名称	提案部局	連携部局	修了単位数	受講対象者	履修期間
まちづくりデザイン学	工学研究科	C S C D	8単位以上		2年
金融・保険	金融・保険教育研究センター	経済・理学・基礎工・情報	8科目以上	社会人	M3年 D4年
ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム (社会人再教育)	ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構	理学・工学・基礎工・医学系・薬学・生命・産研・接合・超高圧・極限・太陽	9単位以上	社会人	2年
ERASMUS MUNDUS 英語授業・現代日本論	文学研究科		8単位以上		3年

※受講対象者

M…博士前期課程・修士課程、生命機能研究科は博士課程1・2年生 D…博士後期課程・博士課程、生命機能研究科は博士課程3年生以上

副専攻制度に向けて、こうした学際融合的な高度副プログラムを今後も強化・拡大していきます。

入学試験

2月25日(月)～26日(火)に前期日程、3月12日(水)に後期日程の個別学力検査が行われます。平成20年度は次のような定員の変更があります。

【学部関係】〈新設〉

学部名	学科名	入学定員
外国語学部	外国語学科	580人
法学部	国際公共政策学科	80人

〈入学定員の変更〉

学部名	学科名	入学定員
理学部	生物科学科	25人→55人
基礎工学部	情報科学科	68人→83人

これにより大阪大学学部生の入学定員の合計は、昨年度の2,540名から3,245名に増加します。

大学院についても、以下のような変更があります。

【大学院関係】〈新設〉

研究科名	専攻名	入学定員
文学研究科	文化動態論専攻	修士課程 19人
人間科学研究科	グローバル人間学専攻	博士前期課程 19人 博士後期課程 8人
言語文化研究科	言語社会専攻	博士前期課程 35人 博士後期課程 13人

〈入学定員の変更〉

研究科名	専攻名	入学定員
文学研究科	文化形態論専攻	博士前期課程 40人→38人
	文化表現論専攻	博士前期課程 42人→37人
人間科学研究科	人間科学専攻	博士前期課程 79人→70人 博士後期課程 38人→34人
経済学研究科	経営学系専攻	博士前期課程 23人→33人
理学研究科	生物科学専攻	博士前期課程 46人→54人
	物質創成専攻	博士前期課程 78人→87人
	機能創成専攻	博士前期課程 39人→45人
	システム創成専攻	博士前期課程 66人→73人
言語文化研究科	言語文化専攻	博士前期課程 30人→32人
	コンピュータサイエンス専攻	博士前期課程 14人→17人
	情報システム工学専攻	博士前期課程 15人→18人
	情報ネットワーク学専攻	博士前期課程 17人→20人
	マルチメディア工学専攻	博士前期課程 17人→20人

〈コースの新設〉

研究科名	専攻名	コース名
経済学研究科	経営学系専攻	博士前期・後期課程 グローバル・マネジメントコース

〈名称変更〉

研究科名	旧専攻名	新専攻名
言語文化研究科	言語文化学専攻 博士前期・後期課程	言語文化専攻 博士前期・後期課程

これらの変更により大学院生の入学定員の合計は、昨年度の2,574名から2,702名に増加します。

大学入試センター試験

1月19日(土)～20日(日)に、センター試験が吹田・豊中・箕面の各キャンパス等で行われました。また、1月26日(土)～27日(日)には歯学研究科で追試験が行われました。関係の方々に多大なご協力をいただいたことに感謝します。

研究推進室

各種財団研究助成等の学内選考

財団法人昭和報公会 2008 年学術研究助成及び財団法人武田科学振興財団 2008 年度一般研究奨励に対して、研究推進室で編成したワーキングメンバーにより下記のとおり学内選考を行いました。

研究助成等の種類	部局からの推薦数	推薦枠	学内選考結果
財団法人昭和報公会 2008 年学術研究助成	11 名	3 名	医学系研究科 (2 件)、 産業科学研究所 (1 件)
財団法人武田科学振興財団 2008 年度一般研究奨励	14 名	5 名	医学系研究科 (1 件)、歯学研究科 (1 件)、 薬学研究科 (1 件)、工学研究科 (1 件)、 免疫学フロンティア研究センター (1 件)

大阪大学研究懇話会

今回で 13 回目となる大阪大学研究懇話会を、3 月 11 日(火)に医学部銀杏会館で開催します。この懇話会は、主として関西の企業等に大阪大学における研究活動等の情報を提供するとともに、本会を通して企業等から研究者等人材の養成、共同研究の実施など本学に対する要望等を受け、教育研究の場に反映していくことを目的としています。

今回は「新生大阪大学と産学連携による高度人材育成」をテーマに掲げ、本学基礎工学部を卒業され、現在、りそな銀行取締役副会長の野村正朗様より、企業側からの要望等をお話いただきます。また、本学からは鷺田総長より「CSR と USR ―企業と大学の社会的責任―」と題しての講演をはじめ、基礎工学研究科、情報科学研究科及び国際公共政策研究科の各教員より、産学連携による高度人材育成の現状等を中心とした内容の講演を行います。

平成 20 年度研究支援推進経費・非常勤研究員経費の配分

研究支援推進経費及び非常勤研究員経費の目的等、配分先及び平成 20 年度配分額は下記のとおりであり、研究推進室では、このたび、関係附属施設、センター及び研究所への配分案を決定しました。

経費名称	目 的 等	配 分 先	平成20年度 配分額
研究支援推進経費	研究プロジェクト等の遂行に必要な技能・技術面での支援者を確保し、本学における学術研究の効果的な推進を図るための経費	関係附属施設、センター及び研究所	79,508 千円
非常勤研究員経費	高度な研究能力を持つ若手研究者を特定の共同研究プロジェクト等に参画させ、本学における研究活動の一層の促進を図るとともに研究者としての人材育成に資するための経費	関係附属施設、センター及び研究所	124,621 千円

評価・広報室

平成20年度に行われる「中期目標期間の評価」(暫定評価)等について

各学部・研究科、附置研究所、全国共同利用施設におかれては、平成20年度に実施される暫定評価の関連資料として、(独)大学評価・学位授与機構による『教育研究評価』に係る「現況調査表」(原案)を昨年12月末に提出いただき、誠にありがとうございました。

同様に、教育・情報室、研究推進室、国際交流推進本部におかれては、「中期目標の達成状況報告書」(原案)の作成にご協力いただき、御礼申し上げます。

これらの原案につきましては、評価・広報室で内容の精査等を行ったうえ、改めて、修正作業等をお願いしております。国立大学法人第一期中期目標期間の重要な評価でありますので、ご理解と引き続きご協力をお願いいたします。

また、全部局にあっては、例年どおり、平成19事業年度達成状況評価シート等の作成作業を並行してお願いすることになっており、例年に増してのご尽力をよろしくお願いします。

なお、評価関係の今後のスケジュールは、次のとおりとなっております。評価関係資料は、大阪大学ポータル内の学内専用ページ「評価・広報関係」に随時掲載しておりますので、どうぞご参照、ご活用願います。

中期目標期間の評価(暫定評価)等 当面の日程表(平成20年1月～平成21年3月)

		平成19年度			平成20年度																	
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月						
中期目標期間の評価（暫定評価）	十九年度及び 中期目標期間の 評価（文部科学省）	I 業務運営以降	担当																	文部科学省 中期目標期間の 評価結果決定・公表		
		1 H16～18年度実施状況概略	各室等 附属病院	作成・修正等依頼																		
		2 H19年度の実施状況 *従前どおり	各室等 (・部局)	部局照会事項依頼	達成状況シートⅡの作成・提出	実績報告書作成班において報告書作成		H19年度評価結果公表 (大阪外大分含む)		H20年度達成状況シートⅡの作成												
		3 H20～21年度の実施予定	各室等 附属病院	作成・修正等依頼																		
	II 教育・研究・その他 *H19年度の実施状況 (従前どおり)	部局	部局達成状況シートの作成		実績報告書作成班において報告書作成		H19年度評価結果公表 (大阪外大分含む)		H20年度部局達成状況シートの作成													
	大学評価・教育研究 評価機構が行う	I 教育(現況調査表)	部局	作成・修正等作業		必要に応じて、修正等		10～12月のうち2日間 大学評価・学位授与機構 による「訪問調査」										「機構」 確定・研究 公表 評価結果				
		II 研究(現況調査表)	部局	作成・修正等作業																		
		III 中期目標の達成状況報告書	各室等	作成・修正等作業																		
	達成状況評価		評価・広報室において達成状況評価(案)の作成																部局達成状況評価書の決定(部局へ通知)		部局達成状況評価書を学内専用HPで公表	
	分業別 認証評価 (*大学評価・学位授与機構) 【平成20年度 受審】		評価・広報室 高等司法研究科	自己評価書作成		4/30 原案提出	内容 確認等	6/30 機構へ 評価書提出	【機構】 訪問調査 (10～12月のいずれか)										評価 結果 公表			
機関別 認証評価 (*大学評価・学位授与機構) 【平成21年度 受審】		評価・広報室 各部局	自己評価書作成 ※作成日程等は、改めて通知する。																			

財務・会計室

平成19年度教育研究等重点推進経費の執行計画

「教育研究等重点推進経費」の第5次執行計画案が役員会で承認されました。今回は学内に追加公募を行い、申請のあった事業に対して、書類審査、ヒアリング審査により選定された執行計画となっています。
採択事業の詳細は以下のとおりです。

部 局 名 等	事 項 名
附属図書館	Web of Science バックファイルの購入
研究推進室（研究推進部／ 産学連携課）	機関帰属知的財産の出願等経費
保健センター	自動身長体重計
保健センター	自動視力計
工学研究科	フォトンクス先端融合研究拠点における研究推進
附属図書館	電子ジャーナルバックファイルの購入
保健センター	無散瞳眼底カメラシステム
免疫学フロンティア研究センター	免疫学フロンティア研究センター事務室設置
ラジオアイソトープ総合センター	放射線総合管理システム改善経費
知的財産本部（研究推進部／ 産学連携課）	バイオメディクス㈱を相手とする知的財産の和解交渉に必要な費用
科学教育機器リノベーション センター（研究推進部／研究 推進課）	リユース可能な研究教育基盤機器整備経費（現有研究教育機器の修理と 汎用性基盤機器としての全学共同利用化促進）
事務局（総務部／総合計画室）	「新たけのこ保育園」に係る設備・備品費及び保育施設運営に係る スタートアップ経費
海外拠点本部（国際部／国際 連携課）	平成19年度（2007）海外拠点本部教育研究センターにおける運営費補填
免疫学フロンティア研究センター	感染動物実験施設の研究環境の改善
安全衛生管理部	化学実験用安全教育 DVD 教材の購入
超高圧電子顕微鏡センター	学内共同利用の高分解能走査電子顕微鏡（日立・S5200型）に対する元素 分析機能の付加
産業科学研究所	大強度密封 RI 線源の廃棄処理
医学系研究科（医学科）	無菌バリア区域の SPF 実験飼育区域への改修計画
医学部附属病院	院内感染対策整備設備
学際融合教育研究プラットフォーム（学生部）	学際融合教育研究プラットフォームにおける学際教育の研究および 支援活動成果の公表
事務局（研究推進部／研究 推進課）	科学研究費補助金の事務処理に係る人件費
薬学研究科	薬学研究科におけるイメージング創薬研究基盤の整備
生命機能研究科	「高度生体機能イメージング研究施設」の整備
執行計画額	合計 278,784 千円

人事労務室

ドクターヘリ搭乗手当の創設

本学では、救命率の向上、災害発生時の迅速な医療救護活動を目的とした、ドクターヘリ運営事業に関する業務が大阪府から委託されております。

同事業において、本学医学部附属病院の医師及び看護師がドクターヘリに搭乗するため、当該手当を創設することとし、関連給与規程の改正等を行いました。

具体的には、

支給対象者等：医学部附属病院に勤務し、医師免許を有する常勤教員、医員（研修医を除く）及び常勤看護師がドクターヘリに搭乗し、救急医療等の業務に従事した場合に支給する。

支 給 額：業務1回につき1,900円。

とすることといたしました。

【平成20年1月1日改正】



【ドクターヘリ】

国際交流推進本部

THES 世界大学ランキング

2007年11月、Times Higher Education Supplement (THES) による世界大学ランキングが発表され、大阪大学は46位にランクされました。2004年に発表されて以来、今回が4回目となりますが、本学は69位、105位、70位と推移し、今回初めてトップ50大学に名を連ねたことになります。2007年のランクにおいて、トップはハーバード大学、続いてケンブリッジ大学、オックスフォード大学、エール大学、インペリアルカレッジロンドン、プリンストン大学、カリフォルニア工科大学、シカゴ大学、ユニバーシティカレッジロンドン、MITとなっています。わが国で大阪大学より上位にランクされたのは、東京大学(17位)と京都大学(25位)の2大学です。最近、本学との関係が深いグローニンゲン大学、上海交通大学、カリフォルニア大学バークレー校は、それぞれ173位、163位、22位にランクされています。

世界大学ランキングで有名なものは、THESの他に、上海交通大学高等教育研究所による研究大学ランキングがあります。論文引用指標で有名なトムソン社も、そのデータに基づいて分野ごとのランキングを行っています。最近では、世界主要企業500社の社長の出身大学でのランキングなども現れています(やはりハーバードが1位です)。なかでもTHESのランキングは、ロンドン・タイムズという親新聞の知名度のせいか多くの大学の関心の的となっています。宮原前総長がある大学を表敬訪問されたとき、訪問先からの第一声が「70位に上がっておめでとうございます」というものでしたし、学長同士の間ではしばしば話題に上がるようです。たかがランキングとはいえ、ランクが上がれば少なからず誇らしい気分になりますし、優秀な研究者や学生を引きつけ大学の教育研究水準の一層の向上に繋がるので、実利的な面でも決して無視できるものではないのです。

THES世界大学ランキングの評価基準は、研究者による評価(ピアレビュー)を40%、教員数に対する被引用論文数の比率を20%、学生数に対する教員数の比率を20%、企業の採用担当者による評価を10%、外国人教員の数及び留学生の数をそれぞれ5%の重み付けで総合評価したものです。国際企画室ではこのランキングについて関係者のご協力を得ながら、かなり突っ込んだ分析を行っています。また、ランキングを行うのであれば、その指標の定義、データ処理の方法など、透明性を持たせること、世界ランキングである以上、特定の国に利するような指標データの使用・作成は避けるべきであることなどを、大阪大学を代表して申し入れています。そうした意見は各所から寄せられているようで、200近くの大学について前回の指標値と今回のそれとを比べてみると、ピアレビューを除いてほとんど相関がないことから、これらの指標はその指標名が同じであっても、その値の具体的な計算方法については、前回と今回とではかなり変えているものと推察されます。

以上のように問題があることも頭に入れた上で、本学の順位が上がった理由はおおよそ以下のように考えられます。本学は、ピアレビュー、対学生教員比率及び被引用論文数比率の3項目で高い得点を獲得しています。そして、2005年以降の順位の上昇には、ピアレビューによる評価が向上したことが大きく寄与しています。また、採用担当者による評価という項目には、昨年までは0という数値が入っており、全く評価に加えられていませんでしたが、本学からのクレームにTHESも対応し、今回はかなり高い点が付されています。このことも順位の向上に役立ったと考えられます。海外拠点の設置や構成員の方々の積極的な国際交流活動のお蔭で、対外的なビジビリティが向上しつつあるといえるでしょう。他大学との比較なども行っていますが、ここでは割愛します。

エラスムス・ムンドゥスと大阪大学

エラスムス・ムンドゥス(以下ではEMと略記します)というのは、欧州委員会(EC)を中心とする欧州諸国の高等教育機関の大規模な学生交流の計画が、欧州を超えて世界に拡大する仕組みとして開発され、実施されているものです。通常3大学以上が連携し、特定分野の大学院レベルの教育プログラムが創られます。学生がこのプログラムに参加すると、それに沿って入学大学以外の大学にも留学することになります。これにより、一つの大学では提供しえない先端分野の高度な教育を提供できることと、学生の交流による相互理解の機会が提供できることとなります。すでに100以上のプログラムが採択され、ECから資金を獲得して実施されてい

ます。EM には欧州内の高等教育機関に限らず、いわゆる第三国についても、パートナーとして部分的に参加できる仕組みが用意されており、昨年 11 月に文学研究科がこれに正式に申請しました。「ユーロカルチャー」というプログラムで、幹事大学はグローニンゲン大学です。

国際交流推進本部では国際企画室が中心となり、昨年 12 月に国際シンポジウム「エラスムス・ムンドゥスと日欧大学間学術交流のための新戦略」を開催しました。EC 日本担当ディエゴ・サマリターノ氏、グローニンゲン大学のローベルト・ヴァーヘナール氏の講演を中心としたものでしたが、24 大学 6 機関から 115 名の参加を得て盛況でした。日本では諸外国に比べ、EM への対応が遅いと言われていますが、潜在的な関心は高いと言えるでしょう。サマリターノ氏の講演では、2009 年より開始される新たな枠組みの「エラスムス・ムンドゥス II」が紹介されました。この枠組みでは、第三国の高等教育機関が、教育プログラム開発時から欧州のそれと対等の立場で参画できるようになっています。本学ではすでに欧州の大学から参画するよう打診された研究者がいますと聞きますので、近い将来実現することが十分期待できます。これらのプログラムが採択に至るまでには厳しい審査があり、採択されるということは、本学の教育研究が欧州の目指すスタンダードを満たすということの証ともなります。

同日行われたパネル討論では、わが国で既に EM に参加した大学関係者等を交え、ヨーロッパからの学生受入れについて解決すべき問題や、アジア諸国における EM の展開について意見が交わされました。総括として、EM に参画することは、世界の最も新しい人材交流の潮流に参加することであり、また日本の高等教育の透明性、信頼性の向上に繋がり有益であることが確認されました。その一方、EM に関わる情報が不足していることから、今後、日本の大学関係者間及びヨーロッパの関係者とのネットワーク構築が必要であるという認識が共有されました。EM の枠組みは、教育システムが必ずしも欧州とは同一でないアジア諸国間での大学間連携教育や、学生交流の促進のモデルとなるものと考えられ、大阪大学がアジア版 EM 構築の旗振り役を務めることができればよいと考えています。



社学連携

21世紀懷徳堂設置準備状況

大阪大学の原点、懷徳堂を甦らせ、大坂町人が持っていたセルフラーニングの伝統を21世紀の今に！の掛け声のもとに、「大阪大学21世紀懷徳堂」が、豊中キャンパス・イ号館を本拠に、いよいよ始動です。来年度のオープニングに向けての、現在の進捗状況をお知らせします。

・イ号館改修

多目的スタジオ（140㎡）は、壁面・天井を黒色で塗装し、調光式照明を設けて、小演劇や音楽会を開催したり、ワークショップ、少人数セミナー・公開講座等に利用できるように改修を進めています。収容人数は最大収容人員80人程度になる予定です。

また、コミュニケーションギャラリー兼オフィスでは、来訪者へのホスピタリティを考慮してデザイン性に富んだ机・イス・ソファ等を配置するほか、検索用パソコンも設置して、本学の社学連携活動の情報をゆっくりとご覧いただける、快適なスペースになるよう準備しています。

・ホームページ作成

本学ポータルサイトのイベント情報やセミナー・シンポジウム情報については、各部局が開催する各種行事について掲載されていますが、21世紀懷徳堂ホームページでは、これらの情報のうち、一般市民向けの行事を抜粋し、より分かり易い表現にアレンジしてアップすることにより、訪問者の自発的参加を促して、参加者の増加に寄与できればと考えています。そのためには、各部局で開催されるイベントやセミナー・シンポジウム情報について、できる限りもれなく掲載していただくようお願いします。

その他、ポータルサイト以外の様々な情報についても可能な限り収集し、社学連携活動に関係する行事等については、改めてイベント情報として21世紀懷徳堂ホームページに掲載することも検討しています。

知的財産セミナー開催

知的財産本部では、10月24日(水)に第1回、11月14日(水)に第2回の、特許庁及び近畿経済産業局との共催による学生を対象とした知的財産セミナーを開催しました。

第1回では、「強い特許を取得するための研究の進め方」を題材に三重大学創造開発研究センターの奥 久輝客員教授(元松下電器産業)が、強い特許権取得を目指した実験



講義中の北村弁理士

の進め方(どこまで結果を出したら出願するのか。包括的な上位概念の権利を取得するためには、追加実施例についていつまでにどの順序で研究を進めるべきか。)や、特許制度の優先権の利点を活用した戦略的な研究プロジェクトの進め方について、例等を挙げながら講義されました。

第2回では、「弁理士という職業と知的財産活用について」を題材に北村光司特許事務所所長の北村光司弁理士が、知的財産制度の概要や弁理士という職業について、また知的財産活用とは誰のために何を活用するのかなどについて、実務経験からの実例を挙げながら講義されました。

第1回の参加者は理系の学生を中心とし、第2回も理系の学生を中心としながらも法学部の学生の参加もあり、各日共に約20名強の参加者が積極的に意見及び質問等を講師に投げかけ、セミナー終了後も熱心な参加者たちが個別に質問に訪れていました。

一般紙にも知的財産に関する記事がここ数年増えている今、研究に携わる参加者、またこれから進路を考える参加者には関心の高いセミナーとなりました。

(知的財産本部)

京都府立嵯峨野高等学校の生徒を対象とした特別授業実施

言語文化研究科では、10月27日(土)、11月10日(土)、11月17日(土)に京都府立嵯峨野高等学校京都こすもす科国際文化系統1年生の生徒83名を対象に、特別講義を実施しました。これは高大連携の一環として実施したもので、今回で5回目となります。

同高等学校は、平成14年度から3年間、文部科学省から「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHI)」の指定を受け、英語教育を重視したカリキュラムの開発、実践的コミュニケーション能力の育成、広範な異文化理解の育成及び大学や海外姉妹校との効果的な連携について、研究・実践を行っています。また、平成18年度、平成19年度は京都府の「学力向上フロンティア校」の指定も受けています。

各回の講義題目は、「言語についての『ジョーシキ』を再考する一言語と民族・国家」(植田晃次准教授)、「音声言語としての英語」(渡部眞一郎教授)、「南太平洋の言語文化事情」(小杉 世准教授)で、映画、歌などもまじえ、楽しく分かり易い内容となるように工夫がなされていました。



毎回2時間の講義でしたが、生徒達は普段高校では受講することのできない大学院の講義とあって、メモをとりながら熱心に聴き入り、時折笑いもあり楽しい雰囲気の中で行われました。

(言語文化研究科)

工学研究科が中国天津大学及び中国科学院理化技術研究所と覚書締結

工学研究科は、中国の天津大学（大学院）と学術交流協定及び学生交流に関する覚書を、中国科学院理化技術研究所と大学院学生共同教育プログラムに関する覚書をそれぞれ締結しました。

天津大学は、中国政府が指定する国家重点大学の一つで、清朝時代の1895年に中国において初めて設置された近代的大学である北洋大学を前身とする長い歴史をもった理工系総合大学です。11月23日(金)、中国の天津大学において、豊田政男工学研究科長及び本協定のコンタクトパーソンである工学研究科南二三吉教授が、天津大学の舒歌群（SHU, GEQUN）副学長を表敬の後、韓金玉（HAN, JINYU）副研究科長、楊福玲（YANG, FULING）国際交流室長及び多くの関係者が出席する中、盛大に協定締結式が行われました。席上、中国における論文指導の功績が認められ、豊田研究科長が1993年に天津大学から名誉教授の称号を授与された話が披露されるなど終始なごやかな雰囲気の下で、今後の両大学の各方面にわたる交流発展を確認しました。締結式終了後には、随行した工学研究科事務部職員2名も当該協定に関連する留学生の受入について、天津大学国際交流室の事務担当者との意見交換を行うとともに留学生宿舍、教育施設の見学を行うなど事務サイドでも活発な交流が行われました。



天津大学締結式（前列左から豊田研究科長、韓副研究科長
後列左から南教授、楊国際交流室長他天津大学関係者）



理化技術研究所締結式（豊田研究科長（左）と趙副所長（右））

中国科学院理化技術研究所は、元中国科学院感光化学研究所と低温技術センター及び化学研究所と物理研究所の一部が統合して1999年6月に北京に設立され、中国における物理学、化学及び工学を背景とした新しいイノベーションを目指す研究機構として高い評価を得ています。工学研究科とは既に学術交流協定及び学生交流に関する覚書の締結を行い、盛んな学術交流が行われているところですが、このたび、さらなる学生交流の推進を期待し、大学院学生共同教育プログラムに関する覚書を締結することとなり、11月24日(土)、中国の理化技術研究所（北京）において、豊田政男工学研究科長、趙震声（ZHAO, ZHENGSHEN）副所長、中国側コンタクトパーソンである段宜明（DUAN, XUAN-MING）教授及び多くの関係者の立ち会いの下、盛大に協定締結式が行われました。

本プログラムは、博士後期課程大学院生に対する共同教育を促進するプログラムで、定められた期間、相手先の機関において指定されたカリキュラムを相互に履修することにより、3年から4年程度で双方の機関の学位が取得できるものであり、現在、理化技術研究所から第1号となる大学院生の平成20年4月の本研究科受入れを目指した準備が行われています。

（工学研究科・工学部）

第2回日越国際大学交流学生セミナー開催

第2回日越国際大学交流学生セミナー「持続的発展を創生する基礎工学」が、11月19日(月)から23日(金)までの5日間にわたって、基礎工学研究科とベトナム科学技術アカデミー物質科学研究所、ハノイ国家大学工学部との共同開催で、ベトナム・ハノイにて行われました。

阪大側からは学生22名、教員10名、ベトナム側からは学生40名、教員8名の参加のもと、ハノイ国家大学会議場及び物質科学研究所講堂を会場に、午前中は材料科学と情報科学に関する9件の講義、午後は小班に分かれて科学技術の持続的発展についての発表と討論が行われ、これらの成果を基に、最終日には班ごとに科学技術の持続的発展についての意見をまとめた発表が行われました。修了式で



討論風景（物質科学研究所にて）

は、修了認定証が授与されるとともに優秀な班と個人が表彰され、成功裏に5日間のスケジュールを終えました。

参加学生の多くは、英語で意見交換しながら討論・発表を行えるこのセミナーを有意義と答えており、日本人学生にとっては現地訪問で国際性を磨き、ベトナム学生にとっては基礎工学研究科との共同大学院DCサンドイッチ、MCジョイント両プログラムへの関心を高める絶好の機会となりました。なお、本セミナーは平成18年10～11月にJASSOの支援を得てベトナムより15名の学生、6名の教員を招へいして基礎工学研究科で開催された第1回に引き続くもので、第3回は本年11月に本学にて開催する予定です。

（基礎工学研究科・基礎工学部）



参加者の集合写真（ハノイ国家大学会議場前にて）

接合科学研究所創立35周年記念行事開催

接合科学研究所では、11月26日(月)に千里阪急ホテルにおいて創立35周年を記念する講演会、式典、祝賀会を開催し、名誉教授をはじめ、海外の研究者、学内外の大学関係者、関連学会、企業関係者ら約240名の出席がありました。

記念講演会では、新日本製鐵株式会社の嶋 宏代表取締役



創立35周年記念式典で式辞を述べる野城所長

役副社長が「日本の鉄鋼業の現状について」と題して講演し、参加者は熱心に聴講していました。その後の記念式典では野城 清所長が式辞を述べ、鷺田清一総長の挨拶の後、文部科学省研究振興局学術機関課の丸山 浩課長補佐をはじめ、平岡和雄溶接学会副会長、浦谷良美日本溶接協会副会長、トーマス H. ノース トロント大学教授から祝辞をいただきました。その後の祝賀会では、豊田政男工学研究科長、中嶋一雄東北大学金属材料研究所長が祝辞を述べた後、荒田吉明名誉教授が乾杯の音頭をとり、和やかな雰囲気の下、35周年を祝い、盛会のうちに終了しました。

また、記念行事の一環として、27日(火)と28日(水)にはホテル阪急エキスポパークでスマートプロセス国際シンポジウムが開催され、国内から140名、海外13カ国から40名の研究者の参加があり、口頭発表やポスターセッションを通じ活発な意見交換を行いました。さらに、29日(木)には大阪大学荒田記念館で共同研究員による研究成果発表会を開催し、最新の研究成果を学内外に公表しました。

（接合科学研究所）

平成19年度基礎工学研究科英語特別コース入学式挙行

英語による科目履修及び研究指導により、修士号及び博士号を取得できる基礎工学研究科英語特別コース博士前期及び後期課程の入学式を、11月26日(月)に基礎工学研究科A棟2階会議室において挙行了しました。

式では、関係者33名が出席し、教育企画推進室長の佐藤宏介副研究科長の司会の下、戸部義人研究科長から式辞があり、平成19年4月及び10月に入学した7か国10名の留学生によるスピーチが行われました。最後に、出席した基礎工学研究科執行部教員、各指導教員、英語特別プログラムWGメンバー及び英語特別コース在学学生とともに記念写真を撮り、終了しました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



基礎工学部技術職員研修(第14回)実施

基礎工学部では、11月27日(火)に「基礎工学部技術職員研修(第14回)」を基礎工学研究科A棟2階会議室において実施しました。

この研修は、教室系の技術職員及び特例嘱託技術職員を対象に、大学における技術職務全般についての視野を養わせ、その立場と責務を自覚させるとともに、自己及び相互啓発の機会を与えて、職員の資質と技術の向上を図り、職務能力の増進を促すことを目的に実施したものであり、研修会には基礎工学部をはじめ、情報科学研究科、極限量子科学研究センター、太陽エネルギー化学研究センターから計12名の参加がありました。



当日は、戸部義人学部長による開講式に始まり、基礎工学研究科の上山惟一教授の特別講演「測定技術あれこれー気液混相流動、乾燥地緑化、無機ナノ構造材料ー」に続いて、同研究科の弓場愛彦准教授の特別講演「半導体微細加工プロセスとその周辺」が行われました。午後からはナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構の施設見学の後、受講生による技術発表が行われ、活発に意見交換がなされました。最後に、平尾雅彦研修実行委員会委員長から修了証書の授与が行われ、研修を無事修了しました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

人道的対人地雷探知・除去技術研究開発推進事業終了シンポジウムで特別実演

基礎工学研究科の糸崎秀夫教授が、日本科学未来館（東京）で12月1日(土)から3日(月)まで開催された企画展『地下展 UNDERGROUND』の関連イベント「人道的対人地雷探知・除去技術研究開発推進事業終了シンポジウム」特別実演において、地雷探知装置の展示とデモ実演を行いました。

この展示は、核四極共鳴を用いた爆発物などの新しい検出技術で、従来の金属探知では金属くずなどの誤報が多く、地雷除去作業の効率が大変悪かった点を改善し、爆発物自体を探知し、地雷を識別することから、地雷除去の効率を大幅に改善することが期待されています。また、同研究内容については、10月17日(水)から19日(金)まで東京ビックサイトで開催されたテロ対策特殊装備展にも大学として唯一出展しており、自衛隊、消防、警察、公安関係などセキュリティ関係者から強い関心が示されました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）



平成19年度大阪大学会計事務研修実施

12月3日(月)から5日(水)までの3日間にわたり、本学職員を対象とした平成19年度大阪大学会計事務研修を、コンベンションセンターにおいて開催しました。

今回の研修は、国立大学法人の会計経理に必要な制度や内規等に精通し、正しい理解の下に能率的で的確な事務遂行のための知識を身に付けることを目的としており、前半は、各人が日々行っている業務が何に基づきなぜ行う必要があるのか等についての理解を深めるため、学内関係者により規程等と実務経験に基づいた講義及び演習が行われました。後半は、監査法人により財務諸表から今後の経営等の指標とするための財務分析について幅広く習得するための講義及び演習が行われ、全日程とも、受講者全員が真剣な眼差しで聞き入り、用意されたテキストに熱心にメモを取る姿が随所に見受けられました。

また、前半の終わりに班別に分かれて行った演習「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）に関する検討」については、ガイドライン対応に係る本学の現状・問題点・今後の改善事項等について、各



班とも各部局ごとの取組状況を中心とした活発な議論が交わされ、また受講生の間からは他部局の実状を知る良い機会だったという声とともに、ガイドラインに対する認識がより一層深まったとの声も聞かれました。

（財務部財務課）

消防訓練実施

理学研究科では、11月28日(水)に豊中市北消防署の指導の下に、総合的な消防訓練を実施しました。

今回の訓練は、熱感知器発報による模擬火災と初期消火・避難訓練、119番及び防災本部への通報訓練、屋内消火栓による放水訓練、煙発生器による煙体験、模擬火災と粉末消火器・二酸化炭素消火器による消火器訓練、消防署員による講話をそれぞれ行いました。訓練参加者は教職員・学生等約200名でした。

この訓練は、従来から、秋季全国火災予防運動に因って行っているものであり、又、例年、化学科3年次学部学生に対する化学実験の授業の一環としても実施しているものです。
(理学研究科・理学部)



薬学研究科では、秋季全国火災予防の一環として、12月4日(火)に学生・教職員合わせて約100名が参加して、消防訓練を実施しました。



安全管理者の田中徹明教授より「防災・防火に努める心構え、初期消火の必要性」について説明があった後、実際に薬学研究科内に設置されているABC粉末消火器、炭酸ガス消火器の2種類について、消火器販売業者より使用方法や使用上の注意について説明がありました。引き続き、2種類の消火器を使った屋外での消火訓練を行い、学生・教職員等が消火器での模擬火災消火に積極的に参加し、消火器の操作を確認するとともに消火器の特質を体感しました。

恒例の消火訓練でしたが、初めて参加した学生をはじめ、参加者各々が初期消火の大切さを認識するとともに火災予防への意識の高揚が図れました。

(薬学研究科・薬学部)

平成19年度事務局消防訓練等を12月5日(水)、吹田市北消防署の指導の下、事務局職員約130名が参加して実施しました。

消防訓練は、事務局の本部共通棟3階北側人事課湯沸室から火災が発生したことを想定し、「通報訓練」、「消火訓練」、「避難誘導訓練」及び「はしご車による避難訓練」を行いました。

引き続き、消防署係官の指導により事務局前庭にて「水消火器による初期消火訓練」を行った後、事務局玄関前にて「屋内消火栓の取扱訓練」を行いました。

消防訓練終了後、指導に当たった吹田市北消防署係官から、実際に火災が発生した場合には、有毒ガスが充満するため、背を低く口・鼻をハンカチ等でふさいで避難するようなどの指導がありました。それを受けて、佐々木順司理



屋内消火栓の取扱訓練



はしご車による避難訓練

事・事務局長から吹田市北消防署へのお礼と、今回の消防訓練を踏まえて、今後は火災予防に関して十分に対応できるようにしていきたいとの挨拶がありました。

当日は寒い一日となりましたが、参加者全員、最後まで消防署係官の指導に熱心に耳を傾け、訓練に取り組んでいました。
(財務部資産決算課)

特別講演会（英語科学論文作成支援）実施

医学系研究科保健学専攻では、12月7日(金)に研究支援委員会活動の一環として、「英語論文ライティングのコツ—ジャンル分析を利用して—」と題する特別講演会を実施しました。



講師は、野口ジュディ武庫川女子大学薬学部教授で、専門分野別英語教育を積極的に推進されており、本学の工学系研究科において非常勤講師として工学英語を担当されています。

この講演会は、若手研究者の英語による論文作成に対するモチベーションを高め、実際に論文を作成する際に必要な知識を提供することを目的としたものです。野口教授は、各専門分野の英語科学論文を書く際に、理解しておくべき論文のジャンルの概念について述べられ、コンピュータプログラムを使用して、実際の保健学分野の論文を例にしたジャンル分析を紹介され、さらに実際の英語論文作成への応用法について講演されました。この新しい方法に参加者は興味を示し、その導入法に関して質問をするなど、大変有意義な講演会となりました。

(医学系研究科・医学部)

薬学部でOSCEトリアル実施

薬学部では、12月8日(土)にOSCE（オスキー）トリアルを実施しました。

OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）は、薬学部6年制（本学部では薬学科）の学生に対して行われる全国統一の薬学共用試験の一部で、病院や薬局での実務実習に必要な技術や態度などを評価するものです。現在、本格実施に向けて、全国の薬学部でトリアルが行われています。



計量調剤（水剤）

当日は、午前中に特定非営利活動法人臨床研究・教育支援センター（SCCRE）の清原達也先生に、「医療コミュニケーションと模擬患者」と題し講演していただき、午後からは、5課題のステーション（試験実施場所）に分かれて、総合薬学科4年生10名を受験者としてトリアルを行いました。本学部ではこのような試験を初めて実施することもあり、受験者は緊張した表情でしたが、患者応対（薬局）、計量調剤（散剤）、同（水剤）、調剤鑑査、薬剤交付（薬局）の各ステーションとも、大きなトラブルもなく無事終了しました。

今回得られた反省点等を基に、本格実施に向けてさらに検討を進めることとしています。

なお、運営には本学部教員全員が当たり、模擬患者としてSCCREの方に参加していただくとともに、評価者として近隣の大学薬学部、大阪府薬剤師会、病院薬剤師会等の方に協力していただきました。

(薬学研究科・薬学部)

技術職員研修（第24回）実施

大阪大学技術職員研修（第24回）を、12月11日(火)、12日(水)の両日にコンベンションセンターにおいて実施しました。

この研修は、本学技術職員が、職務に関する必要な知識・技術等を広く修得するとともに、自己啓発、相互啓発の機会を得ることにより、技術職員としての資質の向上を図ることを目的としたものであり、研修には、11部局から27名の技術職員が受講しました。

今年は、従来の専門分野別のコース分けではなく、年齢によるコース分けという新たな切り口で実施しました。

初日は、三浦 新人事課長による開講式に始まり、続いて、大阪教育大学の西脇永敏准教授の講義「安全について—事故事例をまじえて—」、文学研究科の出原隆俊教授の講義「今、文学とは「読む」ということをめぐって—」が行われました。その後は各コースに分かれた演習を行い、活発な意見交換がなされました。

2日目は、コース別演習の後、本学二瓶文博監事による「技術者に求める職場のマネジメント」、午後からは、保健センターの杉田義郎教授による「衛生について—メンタルヘルス—」の講義が行われた後、総合演習を行い、各コース



二瓶監事による講義

別演習で意見交換した事項等について、全員で活発な議論が行われました。

今回は、安全衛生、文学、マネジメントなど、従来実施していなかった事項について実施しました。受講者は全員積極的に研修に参加し、充実した研修となりました。

最後に、三浦課長から修了証書の授与が行われ、2日にわたる研修を終了しました。

(総務部人事課)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会を、12月12日(水)に基礎工学部シグマホールで開催しました。本学では、人権問題啓発行事の一環として、毎年7月及び12月に講演会を開催しており、12月是人権週間にちなみ開催しています。

今回は、ジャーナリストの角岡伸彦氏を講師に迎え、人権問題委員会委員の平沢安政教授（人間科学研究科）との対談形式により「部落問題の今を語る」と題して、同和問題をテーマに実施しました。

当日は、約60名の教職員・学生の参加があり、参加者は最後まで熱心に聴講し、対談終了後には活発な質疑応答が行われ、大変有意義な講演会となりました。

(総務部総務課)



平沢教授(左)と角岡氏(右)

理学研究科外国人留学生懇親パーティー開催

平成19年度理学研究科外国人留学生懇親パーティーを、12月7日(金)、豊中キャンパスの福利センターにおいて、85名の参加により盛況に開催しました。

パーティーは、WILSON AGERICO TAN DINO 留学生担当教員の司会の下、小谷眞一研究科長の開会挨拶、畑田耕一豊中ロータリークラブ青少年奉仕委員長(本学名誉教授)の挨拶に続き、金澤 浩評議員の発声による乾杯で始められました。

本年も、国際交流活動の盛んな地域クラブからの参加を得て、外国人研究者、指導教員、チューター学生及び国際交流に理解のある教職員・学生が参加し、留学生にとって日頃接することの少ない方々とも懇談する良い機会となりました。

留学生を代表して、TRUONG CONG DUAN さん(D3・ベトナム)が謝辞を述べ、この後、留学生、外国人研究員のユーモアを交えた自己紹介に会場は大いに湧きました。また、恒例のビンゴゲームによるプレゼントの抽選会では、学内の国際交流支援サークルBSPメンバーの学生が進行し、



ビンゴゲームを楽しむ留学生

例年同様の盛り上がりを見せ、楽しい雰囲気の中お互いに懇親を深め、東島 清副研究科長の閉会挨拶の後、名残惜しみつつ散会となりました。

(理学研究科・理学部)

基礎工学研究科留学生年末交流パーティー開催

平成19年度基礎工学研究科留学生年末交流パーティーを、12月13日(木)、福利センター4階食堂(豊中地区)において、約200名の参加者の下、盛大に開催しました。

パーティーは、熊谷悦生留学生担当教員の司会のもと、岡村康行評議員、来賓、久保井亮一留学生相談室長から挨拶があり、田谷正仁副研究科長の発声による乾杯で華やかに始まりました。本年も、留学生相談室の各種事業に貢献した留学生及び日本人学生に対して、感謝状の贈呈が行われました。



畑田耕一名誉教授の来賓挨拶



バグパイプの演奏

また、アトラクションとして、スコットランドの民謡がバグパイプにより演奏され、楽しい雰囲気の中お互いに懇親を深め、盛況のうちに閉会となりました。

なお、本パーティーは、日頃お世話になっている地域ボランティア団体・個人、家主、ホストファミリーに感謝するとともに、留学生、日本人学生、チューター学生及び教職員の親睦を深め、相互交流の輪を広げることを目的に、毎年基礎工学部留学生相談室を中心に催されているものです。

(基礎工学部留学生相談室 HP <http://www.kisr.es.osaka-u.ac.jp/>)

(基礎工学研究科・基礎工学部)

国際交流会館地域交流会開催

国際交流会館地域交流会を、12月12日(水)に豊中キャンパスの「カフェテリアらふおれ」で開催しました。

会には、来賓として在阪総領事館から3カ国3人の総領事・領事をはじめ、地域支援団体の会長・支部長、自治会会長・役員、市役所や近隣小学校の校長・教頭・教諭、ボランティアグループの方々約40名が出席されました。学内からは、総長・副学長をはじめ約40名、国際交流会館居住者約100名の、総勢180名が参加しました。

最初に、国際交流会館館長の鷲田清一総長から、日頃、国際交流会館を支援していただいている方々へ感謝の挨拶があり、続いて来賓の紹介が行われました。その後、言語文化研究科特別研究学生のアレクサンドラ・クリャクピナさんから、在館者を代表しての挨拶があり、続いて、大韓民国駐大阪総領事館の呉榮煥総領事の発声で、乾杯が行われました。恒例となっている在館者による民族舞踊・演奏



中国の民族舞踊「孔雀飛来」

の披露では、ベトナムからの留学生・ナム・グエン・ホアンさんと特別出演のトムさんによるベトナムの民謡、中国からの研究者夫人の戚文杰さんの民族舞踊が披露されました。最後に、国際交流会館チューターの下元浩見さんと友人の山邊さんによる剣道の型が披露されました。今年は日本の文化も披露され、出席者も興味深く見入っていました。

会場では、来賓の方々や在館者と本学関係者との懇談の輪があちらこちらにでき、和やかな雰囲気にも包まれた交流会となりました。

在館者からは、お互いIn館者との交流が持てたこと、また、日頃はなかなか接することができない自国の領事や総長はじめ大阪大学の役員と話すことができ、貴重な時間を過ごすことができたとの感想が多く聞かれました。

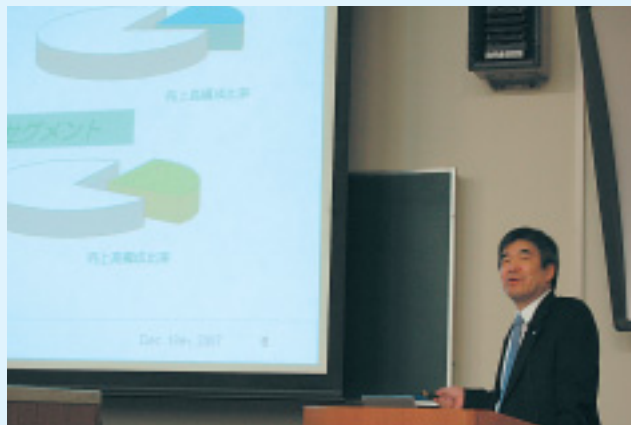
(国際部国際交流課)



鷲田総長の挨拶

基礎工学特別講演会開催

基礎工学特別講演会を、12月18日(火)、基礎工学部国際棟(シグマホール)において(株)東芝の最高技術責任者である東 実氏を講師にお招きして、基礎工学研究科研究企画



推進室、産学連携室、大学教育改革支援プログラム「継続的交換留学制度の構築に基づく人材育成」主催により開催しました。

講演会は、戸部義人基礎工学研究科長の挨拶に続いて、東氏が「イノベーション創出に向けた東芝のR&D戦略—大学院生への期待—」の演題で講演されました。本講演では、(株)東芝における研究開発と戦略、研究者の取り組み、さらに大学での研究と大学院生への期待について、具体的に分かり易い例を入れながら、印象深いお話をいただきました。基礎工を中心に、学生・教職員など約150名の聴衆が熱心に聴講し、最後に大学院生から研究の心構えから趣味に亘る多くの質問に対し、東氏からはユーモアあふれ唆に富んだお答えをいただき、大変有意義なものとなりました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

堺市との連携協力に関する包括協定締結

大阪大学では「地域に生き世界に伸びる」の基本理念の下、地域・社会との緊密な連携を推進してきており、このたび堺市との間に、連携協力に関する包括協定を締結しました。

すでに同市とは、本学産業科学研究所が同市に創設（1939年）されて以来、産学連携及び堺市立病院との協力関係などの交流が行われてきており、今回の協定締結を機に、今後、文化、教育・研究、国際交流及びまちづくり等の様々な分野において、連携がさらに深まっていくことが期待されます。

調印式は、12月17日(月)中之島センターにおいて、大阪大学からは、鷺田清一総長のほか関係理事が、堺市からは木原敬介市長及び関係役職員が出席して行われました。

(総務部総務課)



調印後、木原市長(左)と握手する鷺田総長

工学研究科と阿南市が連携協力に関する基本協定締結

工学研究科は、阿南市と文化的資産の活用及び知的・人的資源の交流を図り、文化、教育、産業、まちづくりなどの分野において、両者の発展と充実に寄与することを目的として、連携協力に関する基本協定を締結しました。



調印後握手を交わす岩浅市長(左)と豊田研究科長(右)

12月21日(金)に工学研究科において調印式が行われ、工学研究科からは、豊田政男工学研究科長、谷口研二教育研究評議員、本協定の窓口となったビジネスエンジニアリング専攻の鳴海邦碩教授、座古 勝教授、山本孝夫教授及び佐藤武彦教授が出席しました。

また、阿南市からは、岩浅嘉仁市長、勝瀬修平企画総務部長、小坂敏春企画政策課長、そして阿南市と大阪大学の橋渡しに労を執られた小松満男阿南高専校長（大阪大学名誉教授）が出席し、協定書を取り交わしました。

なお、この協定締結に際し、平成20年に市制50周年を迎える阿南市は、「環境と産業、まちづくり」の調和した持続型発展を目指した事業の取り組みを希望しており、このテーマを工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻における、産業・社会に貢献できる教育と研究を実施するためのOJE（On the Job Education）教育テーマとして活用することで、両者の今後の発展と充実に向けて連携協力することが期待されています。

(工学研究科・工学部)

附属図書館クリスマスコンサート「テルミンの夕べ」開催

附属図書館クリスマスコンサート「テルミンの夕べ」を、12月19日(水)に豊中本館6階図書館ホールを会場として開催しました。附属図書館クリスマスコンサートは、昨年から実施されており、今年は、菊池 誠サイバーメディアセンター教授によるロシアで発明された世界最古の電子楽器「テルミン」の演奏と、ミニレクチャーを中心に行われました。演奏には、小川哲生理学研究科教授のベースギターと学生アカペラサークルのボイス・パーカッションが色を添え、新鮮なコラボレーションとなりました。

コンサートは予想以上の反響で、約260名の来場者があ



演奏風景（中央がテルミン）



会場の様子

り、立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。近隣の公共図書館等への宣伝効果もあり、うち50名ほどは学外からの来場者とみられ、家族連れの方もありました。

テルミンは、ミュージックソーに似た神秘的な音色が特徴で、SF映画などでもよく使われていますが、楽器の存在は知っていても実際の演奏を初めて聴く来場者も多く、その不思議な音色を楽しんでいました。コンサートの最後には、「mini テルミン」が付録となっている雑誌のプレゼント抽選会も行われ、当選者からは喜びの声が上がっていました。

(附属図書館)

歯学部附属病院で第8回年末ふれ愛コンサート開催

歯学部附属病院では、入院患者さんにやすらぎのひとときを過ごしてもらうため、8回目の「年末ふれ愛コンサート」を12月21日(金)に開催しました。

今回も、医師や看護師に付き添われた患者さんやそのご家族、見学者が開催前よりつめかけ、熱気に満ちたステージとなりました。MIDI、ハンドベル、ピアノ、バイオリン、独唱、サクソによる、クリスマスソングから映画主題歌、最近のヒット曲、クラシックまで幅広いジャンルの演奏や迫力のあるコミカルなダンス、また、手品などが医師や病院職員によって繰り広げられ、どの出し物に対しても、患者さん達の鳴りやまぬ拍手がありました。最後にバイオリンとピアノ伴奏に合わせて、出演者や患者さん、見学者全員による「見上げてごらん夜の星を」の斉唱を行い、患者さん、病院職員、見学者の一同が楽しい一夜を過ごしました。

後日の患者さんのアンケートには、「先生との距離が縮まったようでよかった」「がんといえば死の字が浮かび不



ハンドベルの演奏

安でいっぱいだったが、ここに入院できて元気をいただき感謝している」「初体験であったが、楽しいひと時であった」と感激の声がありました。

(歯学研究科・歯学部)

知の構造化ワークショップ開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）は、12月26日（水）、吹田キャンパスで「知の構造化ワークショップ」を開催しました。このワークショップは、資源、政治、経済、環境、医療等、サステナブルな社会形成に不可欠な多岐にわたる分野の「知」を結びつけるための方法論として着目されるサステナビリティ学のオントロジーの構築を目指し、開催されたものです。

オントロジーは哲学用語で、「存在に関する体系的理論」を意味します。オントロジー工学は、これをコンピュータが理解可能な形式で表現することで、工学的応用を図るものです。「基本概念」と「ロール概念」を組み合わせることで、分野に依存しない構造を作ることができます。この性質を利用し、サステナビリティに関係する学問体系間

による結合を可能にさせるというものです。

ワークショップでは、オントロジーの開発状況の報告を行うとともに、海外でのサステナビリティ学のオントロジーの事例を報告するなど、本学における同研究の位置付けを明確にさせる有意義なものとなりました。

開発を進めるオントロジーは、我々が主メンバーである「サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）」（統括：東大）の中間評価でも、研究成果として紹介されています。

今後も、持続可能な地球社会の実現を目指し、大阪大学がサステナビリティ学の知のプラットフォームとなり得るよう研究を進めていきます。

（サステナビリティ・サイエンス研究機構）

賀詞交歓会開催

1月4日（金）、千里阪急ホテルにおいて、総長、副学長、各部局長、評議員、総長補佐並びに事務局長及び専門員以上の職員約60名の出席により、新年の賀詞交歓会を開催しました。

はじめに鷺田清一総長から新年の挨拶が述べられ、西田正吾理事・副学長の発声による乾杯で開会しました。



出席者は、今年1年が充実した年であることを祈念するとともに、大阪大学のさらなる発展のために尽力していくことを誓い、最後には武田佐知子理事・副学長の締めくくりの挨拶により、盛会のうちに閉会しました。

（総務部総務課）

「宇宙核物理学研究部門」発足記念講演会開催

核物理研究センターは、1月9日(水)、医学部銀杏会館阪急電鉄・三和銀行ホールにおいて、鈴木昭弘信州大学名誉教授からの寄附により設立された「宇宙核物理学研究部門」発足記念講演会を開催しました。

宇宙核物理学は、原子核物理学の中でも特に宇宙や星の中での元素合成や、超新星爆発に関連する原子核反応や構造を研究する分野です。一般の方からも興味を持って頂ける分野ですが、その推進力は純粋な知的好奇心であり、基礎科学の分野で自由な発想に基づく研究部門が個人の寄附で発足したことになります。

講演会では、フランス国ガニル国立研究所から本研究部門に就任した谷畑勇夫寄附研究部門教授の「中性子過剰核研究のゆくえ」の講演を始め、本研究部門の発足を記念して、東京大学原子核科学研究センターの久保野 茂教授の「RI ビームの拓く宇宙核物理」及び国立天文台の梶野敏貴准教授の「元素に刻まれた宇宙・銀河の進化」等の講演が



講演会の様子



左から鈴木名誉教授ご夫妻、宇宙核物理学研究部門の王恵仁助寄附研究部門教、谷畑寄附研究部門教授

あり、会場では熱心な質疑が行われました。

講演会終了後に行われた発足記念パーティーでは、西尾章治郎理事・副学長を始め、学内外の多くの参加者から寄附研究部門発足の祝辞をいただきました。

最後に、岸本忠史核物理研究センター長から、本研究部門発足のため多大なる貢献をいただいた鈴木昭弘名誉教授ご夫妻に対する感謝の言葉、また御支援いただいた多くの方々に対する御礼の言葉が述べられました。基礎科学の分野で、自由な発想に基づく研究部門が個人の寄附で発足したことは希有であり、魅力的な研究の推進で良い前例にしたいとの思いを職員一同が持ち、講演会、パーティーとも盛会裡に終了しました。

(核物理研究センター)

生涯生活設計セミナー（退職準備セミナー）開催

平成19年度生涯生活設計セミナーを、1月15日(火)に、文部科学省共済組合・大阪大学主催、大阪教育大学・和歌山大学・国立民族学博物館・和歌山工業高等専門学校共催によりコンベンションセンターにおいて開催しました。

このセミナーは、定年退職を間近に控えた国立大学法人等の教職員並びにその配偶者を対象に行われたもので、教職員の退職に当たっての心構えや退職後の生活設計に必要



木曾セミナー推進員

な知識を提供することにより、将来への不安を解消し、今後の社会生活、家庭生活の基礎づくりに役立ててもらうことをねらいとして開催されたもので、今年度は112名の参加者があり、退職後の生活について関心の高さをうかがわれました。

当日、本学の佐々木順司理事・事務局長の開会挨拶の後、退職後の生活設計を見つめる観点から、以下のプログラムで進められ、充実した内容の講義が行われました。

- ・「生涯生活設計の必要性 退職後の健康プラン」
(教職員生涯福祉財団 セミナー推進員 木曾 長)
- ・「退職後の生きがいプラン」
(教職員生涯福祉財団 セミナー推進員 木曾 長)
- ・「共済年金・退職後の医療保険」
(教職員生涯福祉財団 セミナー推進員 設楽 徹)
- ・「経済生活のプラン・資産運用」
(教職員生涯福祉財団 事業課長 芳賀正保)
(総務部人事課)

医療安全に関する講演会開催

歯学研究科及び歯学部附属病院では、12月4日(火)、D棟4階大講義室において、教職員及び学生等を対象に、医療安全に関する資質の向上を目的とした講演会を開催しました。

当日は、雫石 聡病院長が趣旨説明をした後、医療法人仙養会北摂総合病院顧問の吉田芳子先生から「Medical Professional Adjustment」と題し、多年にわたり患者接遇に携わってきた経験や具体例を交えた講演が行われました。参加者は約180名で、盛会のうちに終了し、医療安全に関する認識と理解をまた一つ新たにしたいとの声が聞かれました。

(歯学研究科・歯学部)



院内感染防止に関する講演会開催

歯学部附属病院では、1月16日(水)に、D棟4階大講義室において、院内感染防止に関する資質の向上を目的として、教職員及び学生等を対象とした講演会を開催しました。

当日は、雫石 聡病院長が趣旨説明をした後、大阪府吹田保健所参事の峯川章子先生から「院内感染防止対策について」と題し、医療監視等で様々な病院を指導してきた豊富な経験を踏まえ、具体例を交えた講演が行われました。参加者は約350名にのぼり、盛会のうちに終了し、参加者からは、院内感染防止に関する認識と理解をまた一つ新たにしたいとの声が聞かれました。

(歯学研究科・歯学部)



理学研究科「第9回理学懇話会」開催

理学研究科では、1月17日(木)、千里阪急ホテルにおいて、「第9回理学懇話会」を開催しました。本懇話会は、企業等の幹部として活躍中の理学研究科・理学部卒業の方々に委員をお願いして参加していただき、意見交換等を行うもので、今年は14名の委員及び本研究科の教員27名が出席しました。

懇話会の席上では、本研究科の2名の教授から最新の研究についてそれぞれ紹介があり、続いて、「東レの研究開発と産学連携」と題し東レ株式会社理事の大林元太郎氏に



講演を行う大林氏



理学懇話会の様子

ご講演いただきました。会の後半には、「法人化に伴う理学研究科の教育・研究環境の変化と展望について」と題した、小谷眞一研究科長からの報告、説明が行われました。

また、意見交換の中では、学外委員から大学外の視点で活発な提言が行われ、今後の本研究科の教育・研究運営に係る助言等として、大変有意義な会となりました。

引き続き行われた懇談会では、和やかな雰囲気のもと活発な意見交換が行われました。

(理学研究科・理学部)

理学研究科と慶応大学理工学研究科の部局間教育研究連携協定締結

理学研究科と慶応義塾大学大学院理工学研究科は、数理科学分野の教員の相互交流などを通じた教育研究連携の推進について合意し、1月18日(金)、慶応大学において連携協定の調印式を執行了しました。調印式には、本学から小谷眞一理学研究科長、小磯憲史数学専攻長が、慶応大学からは真壁利明理工学研究科委員長、太田博道基礎理工学専攻長らが出席しました。慶応大学は、数理科学分野の教育・研究で21世紀COEの拠点校に選ばれており、そのアクティビティは極めて高く、国際的にも高い評価を受けています。

この協定は、数理科学分野の教員の相互派遣を通して、教育研究の連携を深め、将来的には相互の院生指導実施も視野に入れるなど、両校の教育研究活動のさらなる充実、研究交流のより一層の促進、数理科学の発展への積極的な寄与などが期待されています。

なお、この連携は日本国内で反響があり、日経産業新聞



(写真左から)小磯専攻長、真壁研究科委員長、小谷研究科長、太田専攻長(1/21)、日刊工業新聞(1/21)、教学新聞web(1/21)、神奈川新聞(1/28)等に掲載されました。

(理学研究科・理学部)

セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修実施

1月25日(金)、セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修をコンベンションセンター会議室において実施しました。この研修は、今年度において、新任の部局長、専攻長、学科長、事務(部)長、課長、補佐、技師長、看護師長及び新任の教授等の新たに監督者となった教職員及びセクシュアル・ハラスメント防止等に関する部局委員会委員等に対して、セクシュアル・ハラスメントの防止等に関し、その求められる役割等について理解させることを目的としたもので、118名が参加しました。

研修会では、人権問題委員会委員長の高木淳一蛋白質研



究所附属プロテオミクス総合研究センター教授からの挨拶の後、高等司法研究科の島岡まな教授から「キャンパス・セクシュアル・ハラスメントと刑事罰の可能性」と題する講演が行われ、日本におけるキャンパス・セクシャル・ハラスメント(CSH)への法的対応及びフランス刑法におけるセクシャル・ハラスメント罪及びモラル・ハラスメント罪等について、民事法的対応及び刑事法的対応等が分かりやすく説明されました。

受講者は熱心にメモを取り、最後に活発な質疑応答が行われ、好評のうちに終了しました。

(総務部人事課)

ソウル大学校環境安全院訪日視察団一行との交流実施

1月25日(金)に、ソウル大学校環境安全院及びKRICT(韓国化学技術研究センター)安全部門の15名が、本学安全衛生管理部と環境安全研究管理センターを訪れました。

はじめに、安全衛生管理部において、本学の安全衛生管理体制と活動状況について紹介が行われました。続いて、環境安全研究管理センターにおいて、薬品管理システムの運用を中心とした紹介と廃液処理施設の見学が行われ、ソウル大学校における取り組みとの比較から情報交換が実施されました。

いずれの交流においても、視察団の各メンバーと熱心な質疑応答が行われ、国内のみならず、海外の大学においても、安全に係わる取り組みが重要な課題であることが認識されました。

今回の交流を機に、今後も安全管理における情報共有を深めていく予定です。

(安全衛生管理部・環境安全研究管理センター)



大阪大学室内楽アンサンブルからのお知らせ

阪大NOW No.100(2007年月12月号)のキャンパスニュース(P.33)にてご案内いたしました第6回演奏会日程が、4月29日(火・祝)から5月3日(土・祝)に変更となりました。



1月27日
『知デリ』レポート

モ テ 阪。



— 新しい阪大生をつくる —

コミュニケーションデザイン・センター(CSCD) presents 『知デリ』in アップルストア心斎橋

■ 心斎橋？フェロモン？

この場所、この言葉から誰が大阪大学を想像するだろう。屋下がりのアップルストア心斎橋で、観客をひきつける2人。トークのお題は「フェロモン」。彼らは「色男について」や「香りと嗅覚について」といった自分の専門からフェロモンを語っていく。しかし、これはれっきとして、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)の社会学連携プログラムとしてスタートした、CSCD主催のトークプログラム『知デリ』である。話す人も大阪大学の教員なら、進行も大阪大学の学生だ。

着流しに長髪で登場した、ヨコタ村上孝之先生(言語文化研究科)の専門は文学であり「恋愛」!? 一方、スーツを着こなす倉橋隆先生(生命機能研究科)の専門は「嗅覚」!! 彼らは人文学者と科学者というまったく異なる立場からトークを進める。お客さんの質問を交えて、議論はさらに盛り上がっていく。

さて、このフェロモンという「人を惹きつける能力」は人間にも存在するのだろうか。

人文学者は言う。「異性を惹きつける『色男』の定義は時代によって変わるものであり、我々で変えていけるものである。人間はテキストの集合体なのだから。」と。一方、科学者も言う。「ヒトには昆虫のようなフェロモンはない。たとえ存在しても、ヒトの場合はフェロモンがすべてではない。ヒトの脳は我々では理解しきれないほど。」この回答に司会者もお客さんも目を丸くしているところに、倉橋先生はにこやかに言葉を付け加えた。「複雑だからこそ、科学者の探求には終わりが無い。」と。

彼らは打ち合わせもなければ今日が初対面。分野の異なる二人だが、多くの共通点を持ち、違う分野に立ちながら同じ方向を向いているようだった。屋下がりの2時間はあっという間に過ぎていった。

終了した後にお二人に話を伺った。「科学というすごく特化した話に興味を持ってもらえて、質問のレベルも高く、まさに阪大ここにありきという感じですね。」と倉橋先生。終了後に話した参加者とのつながりもでき、交流の輪が広がったのだそうだ。また、ヨコタ村上先生は「世の中をちょっとは変えたい。学生によりよい生活をしてもらいたいと思っているのが、少しは伝わったのではないかと、おっしゃっていた。直接人々に訴えかけることのできるこのイベントならではの感想である。

会場の片づけを終えた学生は、一仕事終わった満足げな表情で、アップルストア心斎橋を後にしていった。



▲会場は大勢の来場者でにぎわっていた。

■ 知デリ = 知のデリバリー

大学に眠る「知」のリソースを、学外に向けて伝えていこうと始まったのが『知デリ』。科学技術・哲学・アートなど多分野の専門家で構成されるCSCDメンバーが、アップルコンピューターのショッブと連携し、これまでに東京（銀座）と大阪（心斎橋）で開催してきた。

「表現」や「技術」に関する知術を社会に還元することを目的に、毎回ジャンルを超えた多彩なゲストを迎え、アートとテクノロジーの関係を探りながら、新しい発想や創造に繋がる場を提案してきた。

■ 求む、阪大生の積極的参加

今回の『知デリ』で新しく行われた試みは、『学生の参加』。今回は有志の学生が企画・運営から参加し、ゲストの選出や当日の司会進行も学生が主体となり組み立てていった。「教員はヒントを与えるだけ。学部を超えて集った学生が、単位に関係なく、学外に出てどんなことができるのか。（学生に知って欲しかったのは）イメージを形にするにはギャップがあるということ。」とCSCDの木ノ下智恵子先生は言う。イベントを企画するには、まずは運営するには何が必要であるかを探し、自ら行動していかなければ話は進まない。自分自身が興味を持ち、楽しみながら企画・運営を進めていく。学生は、イベントスタッフの一員としての経験を培うことで、社会に向けて行動することを学んでいくのである。また、ここで成長するのは学生だけではない。学生の行動を見つめ、意見や視点をくみ上げることで、CSCDも進化するのだという。



▲企画・運営する学生同士での直前ミーティング。緊張と真剣さが伝わってくる。



▲今回のイベントのチラシ。これも学生の制作によるもの。

■ 進化する大阪大学

今回3回目を迎えた『知デリ』は、まだ産声を上げたばかり。コミュニケーションデザインという未知なる主題を見つめながら、定期開催を目指してCSCDメンバーにも気合が入る。

「イカ版」から「モテ版」へ。平成16年に法人化して以来、大阪大学は教育目標に教養とデザイン力、国際性の3つを掲げてきた。21世紀懐徳堂が始動する今年、社会から囑望される阪大生になるために、CSCDから今後も目が離せない。

企画に携わった5人の学生に話を伺いました

公共の場でのトークイベントを企画するのは初めてで、大変だったけれどもその大変さが楽しかったと思います。なにより予想以上の数のお客さんが来てくれたことがとても嬉しかったです。

このイベントを運営するにあたって心がけたことは、どう見えたら面白いのか、自分たちにしか提供できない面白さを提供しよう、という点です。司会をおこなうにしても、お客さんが興味を持つような話題に話を進めていったり、トークが盛り上がるように話を進めていくことに重点をおきました。結果として、たくさんのお客さんに興味を持っていただけたようで、今回の企画は成功だったと言えるでしょう。

私たち5人のうち3人は大学院生で、それぞれの「専門分野」という狭い環境の中で生活をしていました。しかし、今回の『知デリ』の企画・運営を通じて、自分とは異なる専門分野の人たちと対話しながらひとつのことをやり遂げるという面白さに気づきました。ぜひ、後輩のみなさんにもこの面白さに気づいてほしいと思います。そして、今回の『知デリ』を超えるイベント作りにどんどん挑戦していったほしい、と思っています。



▲今回の企画メンバー。左から中垣麗子さん（理M1）、中津嘉隆さん（基M1）、竹内亮介さん（理M2）、松本ひとみさん（文3）、吉良拓馬さん（基4）。

じゃあ、『知デリ』を主催しているCSCDってどんなところ？

知デリを主催している

CSCDってどんなところ？



「CSCDってどんなところ？」 金水敏 CSCD センター長にお話を伺いました。

平成 15 年、第 15 代総長・宮原秀夫先生は、大阪大学の教育目標として「教養・デザイン力・国際性」の涵養を掲げました。このスローガンに対応して、平成 16 年には大学教育実践センター、17 年にはコミュニケーションデザイン・センター（Center for the Study of Communication-design、以下、CSCD）、18 年にはグローバルコラボレーションセンターがそれぞれ設置されました。CSCD は、文部科学省に対して申請した特別教育研究経費「コミュニケーションデザイン教育事業の推進：コミュニケーションデザイン・センター」に基づいて設置されたものです。CSCD 設置の前史としては、平成 14 年、大阪大学の文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科が申請した 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」と、鷺田清一・文学研究科教授（当時）が代表者となって申請した平成 14 年—15 年度文部科学省・科学技術振興調整費・科学技術政策提言「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」が挙げられます。

CSCD の事業には、お互いに支え合う 3 本の柱があります。一つは、全学の大学院生を主な対象としたコミュニケーション教育の提供、もう一つは学学連携活動の展開、そして 3 つめは他ならぬ「コミュニケーションデザイン」の研究です。この事業を展開するために、CSCD の活動に 5 つのテーマを立てました。「科学技術」「臨床」「減災コミュニケーション」「アート & コミュニケーション」「デザイン & メディア」の 5 つです。そしてこれらのテーマのもとに、科学技術社会学、看護学、法廷外調停、人類学、芸術学、工業デザイン、景観設計、臨床哲学、劇作家、アート・プロデューサー、ダンス・プロデューサー等さまざまなバックグラウンドを持つ多彩な人材が集められました。これだけの規模と多彩さを持った学内組織が、大学院生を中心に全学共通教育を提供するという例は、恐らく世界のどこを見渡してもありません。東京・大阪のアップルストアで展開している『知デリ』（阪大の研究者と異分野の専門家によるトーク・イベント）や、中之島新線の駅で実施するコミュニケーションカフェなど、ユニークなアウトリーチ活動も引き続き行っていきます。どうぞ平成 20 年度も、CSCD の活動にご注目下さい！



センター長
金水 敏 教授



▲基礎工学部棟にある CSCD オレンジショップ。CSCD の授業や、様々なテーマについて議論しあう『オレンジカフェ』がおこなわれている。

私の本業は劇作家・演出家ですが、大阪大学での仕事は主に二つです。一つは、演劇のワークショップを通じて、学生さんたちにコミュニケーションについて考えてもらうこと。演劇をやればコミュニケーション能力がつくなど、おこがましいことは考えていませんが、私の講座が皆さんに、これまでとまったく違った視点を与えられることは保証できると思います。それが芸術家の仕事なので。

もう一つは、授業プログラムや個別の研究の支援です。皆さんは、ポスターを作るときにはデザイナーに依頼するし、テーマソングを作るときには作曲家に依頼しますね。授業にもシナリオが必要なはずで、そのシナリオを書く専門家である私は、大阪大学の様々な授業を面白くする手助けができと考えています。

研究においても同様で、たとえば今は、工学部の浅田稔先生や石黒浩先生と一緒に、世界初のロボットと人間による本格的な演劇を創るプロジェクトを進めようとしています。

まだこの大学に来て二年目ですが、「ことば」に関わるすべての場所に、顔を出したいと思っています。



平田 オリザ
教授



▲万博公園前にあるCSCDのオフィス。ここで日々新しいプロジェクトが練り上げられていく。

CSCDのスタッフは どんなことをしているの？

「具体的には何の研究をしているんだろう？」
CSCDの3人の教員の方にインタビューしました。

私の専門は看護学ですが、CSCDでは「臨床コミュニケーション」に関連した授業科目を担当しています。「臨床コミュニケーション」では、対人コミュニケーションを主題として、様々な現場での出来事やその成り立ちの構造を、多様な視点から捉えなおすを試みています。たとえば、意識障害とされる人の援助場面において、その人から返事が返されなくてもなお話かけ続ける看護師の経験を取り上げます。そして、何が看護師にそうさせているのか、そこで何が起きているのかを議論していきます。そこには、交流が困難だからこそ見えてくることがあるかもしれません。人間の営みは、はっきり見えることや明確に説明できることのみから成り立ってはいないのです。それ以外の見えや理解、想像の広がり、逆に目の前の状況に意味を与えているともいえます。

この、見ていけるけれどもはっきり自覚できていない私たちの経験、これを〈身体〉の感覚的な次元から捉えなおすことが、私の研究の主題です。その探求を、医療現場でのフィールドワークや聴き取りによって行っていますが、他方で、〈身体〉の表現を捉えなおすを試みるワークショップやカフェ、授業なども手がけています。こうした場での協働をとおして、学生の皆さんとともに、〈身体〉に新たな可能性を見出していきたいと思っています。



西村 ユミ
准教授

平川 秀幸
准教授



CSCDでは「知デリ」も含めて、様々な科学技術と社会をつなぐ研究教育活動が行われています。教育面では、全学の大学院生向けに「科学技術コミュニケーション入門」、「科学技術コミュニケーションの理論と実践」があり、2008年度からは特に文科系を対象とした「現代社会と科学技術」が始まります。

実践および研究面では、専門家と市民の対話のための「サイエンスカフェ」を、学内拠点「オレンジショップ」(基礎工棟1階)や学外の様々な場所で行うほか、

多様でより効果的な科学技術コミュニケーションの形を探る研究プロジェクトが動いています。

2007年4月からは特に「サイエンスショップ」に力を入れています。これは、市民や市民団体からの相談や依頼を受けて、大学の学生や教員が研究・調査を行い、市民の問題解決や公共的活動を手助けする組織です。学生にとっては、異分野や多様な背景を持った人々と共同作業をすることで、コミュニケーション能力や専門知識の応用力、運営・企画力などを磨くことができます。2007年度は試験プロジェクトとして、豊中キャンパスに程近い猪名川・藻川の水质調査を、漁協や市民グループの依頼を受けて実施しました。2008年度からは21世紀懐徳堂(豊中・イ号館)に窓口を開き、研究調査案件を一般募集するなど、本格的な活動に着手する予定です。たくさんの学生の皆さんの参加・協力を期待しています。

CSCDの最新情報は
<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/>
までアクセス!

阪井丘芳教授「第89回米国口腔顎顔面外科学会 Best Oral Abstract Scientific Presentation Award」受賞

歯学研究科高次脳口腔機能学講座顎口腔機能治療学教室の阪井丘芳教授が米国口腔顎顔面外科学会（The American Association of Oral and Maxillofacial Surgeons : AAOMS）の Best Oral Abstract Scientific Presentation Award を受賞しました。

米国口腔顎顔面外科学会は、口腔顎顔面外科学の臨床・教育・研究の発展を目指し、歯学、医学、工学などの多分野の交流を目的とし、1918年に設立された学会です。会員数は米国だけで7,000名を越え、今年度、第89回を開催するに際して日本口腔外科学会と韓国口腔外科学会が合同参加し、ハワイのホノルルコンベンションセンターで、第1回日米韓口腔顎顔面外科学会合同学術会議が行われました。

今回の Best Oral Abstract Scientific Presentation Award は、優秀な講演発表を行った演者に授与されるもので、講演タイトルは、「Morphogenesis of Salivary Gland Epithelia: Exploring the Regeneration Process for Xerostomia Treatment」です。これは、阪井教授が取り組んでいる口腔乾燥症の治療を目指して、唾液腺上皮に発現する遺伝子を解析し、唾液腺を再生するためのメカニズムを探る組織工学的アプローチを紹介したものです。本賞は、10月13日(土)、ホノルルコンベンションセンターで講演後に選考され、賞状を授与されました。

(歯学研究科・歯学部)



大阪大学共通教育賞表彰式挙行

大学教育実践センターでは、11月6日(火)に事務局 301 会議室において、平成 19 年度第 1 学期大阪大学共通教育賞の表彰式を行いました。

この大阪大学共通教育賞は、全学共通教育の授業を担当する本学教員及び非常勤講師を対象として、優れた授業を実践した教員、優れた教科書等を著した教員、優れた著述を行った教員、並びに全学共通教育の実施運営に顕著な功労のあった教員を表彰することによって、共通教育の質的向上を図ることを目的に平成 14 年度に制定されたもので、今回が 11 度目の表彰となりました。この顕彰制度が教育評価の先駆的な試みとして、本学の教育の発展に寄与できることを願うものです。

大阪大学共通教育賞の選考は、全学の教員及び学生を対象に行ったアンケート結果に基づき、選考委員会において、教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価した結果、16名の教員が選出されました。

表彰式では、鷺田清一総長から表彰状と記念品の授与が行われ、小泉潤二理事・副学長、工藤真由美大学教育実践センター長、眞鍋昭治郎副センター長、和田榮史事務長も列席し、受賞者を祝福しました。



平成 19 年度第 1 学期 大阪大学共通教育賞受賞者

氏 名	所 属・職 名
山 中 浩 司	人間科学研究科・准教授
竹 中 浩	法学研究科・教授
下 田 正	理学研究科・教授
能 町 正 治	理学研究科・教授
東 島 清	理学研究科・教授
安 田 誠	工学研究科・准教授

氏 名	所 属・職 名
津 田 保 夫	言語文化研究科・准教授
日 野 信 行	言語文化研究科・准教授
岩 居 弘 樹	大学教育実践センター・教授
竹 蓋 順 子	サイバーメディアセンター・准教授
大久保 範 彦	非常勤講師
齊 藤 了 文	非常勤講師

氏 名	所 属・職 名
谷 口 真由美	非常勤講師
馬 場 桂一郎	非常勤講師
古 川 岳 志	非常勤講師
O'CONNOR AIDAN	非常勤講師

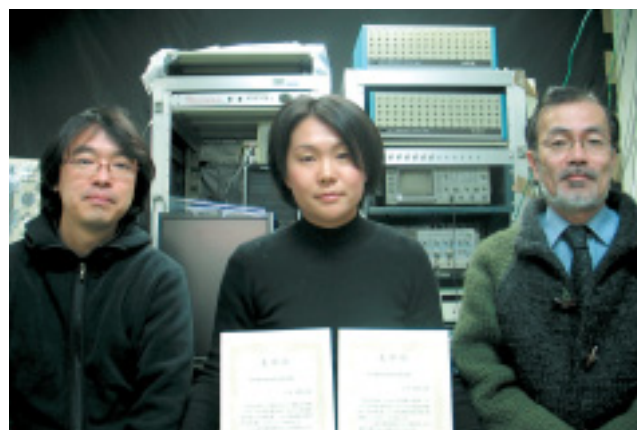
小竹康代さん、「日本神経回路学会研究賞」と 「日本神経回路学会奨励賞」をダブル受賞

生命機能研究科博士課程5年（5年一貫制）の小竹康代さんが、「サルV4野皮質局所における色選択性細胞の空間配置」に関する研究で、平成19年度の日本神経回路学会研究賞と日本神経回路学会奨励賞をダブル受賞しました。

日本神経回路学会研究賞は、同学会全国大会および電子情報通信学会ニューロコンピューティング研究会で発表された論文のうち、特に優秀で、神経情報処理の理解を著しく進展させた研究に対して送られるものです。奨励賞は、同分野で将来を嘱望される新進研究者を奨励することを目的としています。今回の研究賞は、森本広志氏（元基礎工学研究科博士課程、現富士通研究所）、田村 弘生命機能研究科准教授、藤田一郎生命機能研究科教授の3氏との共同受賞です。

部屋の中の机の配置を見ることで、その部屋がどのような目的に使われているかを推測できます。同様に、さまざまな機能を持つ神経細胞が脳局所でどのように配列されているかを知ることは、そこでの計算情報処理の理解に重要な手掛かりを提供します。小竹さんは、多細胞活動同時記録法を用いて、色感受性細胞の配置の規則を明らかにしました。

受賞式は、11月15日(木)に北九州市で開催された日本神経回路学会総会において行われ、賞状と賞金が授与されました。（生命機能研究科）



受賞研究を行った実験室にて（左から、田村准教授、小竹さん、藤田教授）

兒玉了祐教授、田中和夫教授、羽原英明助教、尾崎典雅助教、 三間罔興教授、疇地 宏教授、坂和洋一准教授、 重森啓介准教授「2007 Daiwa-Adrian Prize」受賞

大学院工学研究科の兒玉了祐教授（代表）、田中和夫教授、羽原英明助教、尾崎典雅助教、レーザーエネルギー学研究センターの三間罔興教授、疇地 宏教授、坂和洋一准教授、重森啓介准教授が、The Daiwa Anglo-Japanese Foundation（大和日英基金）より「2007 Daiwa-Adrian Prize」を受賞しました。この賞は、基礎科学、応用科学の分野で、優れた日英提携プロジェクト、日英科学交流への貢献を顕彰するもので、科学者、故エイドリアン卿を記念して1992年に創設され、3年ごとに授与されています。

今回の受賞は、これまでの日英科学交流に加え、「高エネルギー密度科学—プラズマ物理の新展開」という新しい科学分野展開の可能性が評価されたものです。授与式は、12月4日(火)、英国ロイヤルソサエティにて行われ、賞状が授与されました。

（工学研究科・工学部、レーザーエネルギー学研究センター）



中央左：故エイドリアン卿 夫人、中央右：兒玉教授

細谷 裕教授「2007年度第53回仁科記念賞」受賞

理学研究科物理学専攻の細谷 裕教授が、12月6日(木)に財団法人仁科記念財団「2007年度第53回仁科記念賞」を受賞しました。

財団法人仁科記念財団は、仁科芳雄博士の偉大な業績を称えとともに、原子物理学の基礎とその応用の分野において優れた研究者を育成するため1955年に設立され、仁科記念賞は、上記分野で優れた研究業績をあげた研究者を表彰することを目的としています。ここにいう原子物理学とは、原子、分子、原子核、素粒子はもとより、これらの関与する基礎的なミクロの立場に立った物理学で、直接原子物理学に係わるものに限らず、理学、工学、医学等あらゆる分野において、原子物理学に深い関連のある研究が含まれます。

今回の受賞は、素粒子物理学の統一理論で大きな役割を果たしている「細谷機構」と呼ばれるメカニズムを、世界で最初に指摘した功績が高く評価されたことによるものです。細谷機構は、世界には時間と空間をあわせた4次元より高い次元があると考え、時空理論での対称性の破れを説明するメカニズムで、1983年に提唱されました。その後大きく発展し、現在の統一理論にも使われ、今後の加速器実験での検証が待たれています。

授賞式は、12月6日(木)東京千代田区の東京会館にて行われ、賞状と賞牌が授与されました。また、12月11日(火)には理学研究科物理学専攻内において、受賞記念講演会と祝賀会が開催されました。

(理学研究科・理学部)



ヨコタ村上孝之准教授「第29回サントリー学芸賞」受賞

言語文化研究科のヨコタ村上孝之准教授が、第29回サントリー学芸賞を受賞しました。この賞は、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究、評論活動を、著作を通じて行った個人に対して贈られ、政治・経済、芸術・文学、社会・風俗、思想・歴史の4部門について、受賞者とその作品が決定されるものです。

ヨコタ村上准教授が、2007年1月に出した『色男の研究』(角川学芸出版)が、同学芸賞の社会・風俗部門で選ばれました。

贈呈式は、12月11日(火)に東京・丸の内の東京会館で行われました。

(言語文化研究科)



前列右端がヨコタ村上准教授

外国語学部スウェーデン語専攻がスウェーデン政府「2007年大賞」受賞

毎年12月、スウェーデンではノーベル賞の授与式が行なわれますが、今回ほぼ同時期に、スウェーデン政府（外務省）が世界でスウェーデン語・スウェーデン文化の促進に最も寄与した教育研究機関に贈る「2007年大賞」（報奨金2万クロナ）を、外国語学部スウェーデン語専攻が受賞しました。

これは世界においてスウェーデンへの関心を高める目的で活動する同国の広報機関 Swedish Institute を通して、2003年より毎年スウェーデン語教育に携わる諸外国の大学や研究機関に授与されている功労賞です。スウェーデン語を教授している大学は世界41カ国に200機関以上あり、これまでに北米で1大学、ヨーロッパで4大学が受賞しており、今回の受賞はアジア・オセアニアでは初めてとなります。受賞理由は次の2点です。

1. スウェーデン語及びスウェーデンの文学、歴史、社会研究を通して幅広く展開されているスウェーデン研究への真摯かつ長年にわたる取り組み、並びにそれにより学生たちにスウェーデン研究へ大きな関心を生み出していること。
2. 本学のスウェーデン語専攻が多くの日本人に北欧全般、とりわけスウェーデンに対する肯定的な見解の形成へとさまざまな方法にて多大な貢献をしてきたこと。

今回の受賞は、旧外大における期間も含めた22年間、これまで多くの常勤・非常勤の教員一同が一丸となって、日本ではマイナーと思われてきたスウェーデンについて地道に教育・研究を果たしてきた賜物であり、これらのことが、私たちが自覚している以上にスウェーデン本国では重要視され、かつ高い評価を受け、そして最後にスウェーデン人一人一人から本学スウェーデン語専攻の教員へ今後もより一層の期待が寄せられているのだという嬉しい確信となりました。

これらの活動の一環として、今年の5月23日(金)に本学で一般をも対象とした「スウェーデン留学フェア」の開催を予定しています。

(外国語学部)



スウェーデン語研究室スタッフ
(前列左からヨハンナ・カールソン外国人招へい教員、菅原邦城名誉教授、清水育男教授、後列左から高橋美恵子准教授、古谷大輔准教授)

日本学生支援機構優秀学生顕彰事業表彰式実施

1月16日(水)に、日本学生支援機構 平成19年度「優秀学生顕彰事業」の表彰式が総長室において実施されました。

この優秀学生顕彰事業は、学部生（3年生以上）を対象に、経済的理由により修学に困難がありながらも、学術、文化・芸術、スポーツ活動、社会貢献活動の4分野において優れた業績を挙げた学生を顕彰することで、これら活動の一層の促進を奨励・援助し、もって21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的として、日本学生支援機構により平成17年度に創設されたものです。

本学からは、文化・芸術分野で外国語学部4年生の橋本康浩さん、社会貢献活動分野で同じく外国語学部3年生の福本友香里さんの2名が、それぞれ奨励賞を受賞されました。橋本さんは、第6回、第7回全日本学生ドイツ語弁論大会2位受賞等の業績が評価され、また、福本さんは、ジンバブエ支援（演奏CDの売り上げ全額寄付、ジンバブエの生活文化を日本へ広めるなど）のボランティア活動が評価されました。

当日は、杉本孝司外国語学部長、大和谷 厚学生生活委員長の列席のもと、小泉潤二理事・副学長から表彰状及び記念品が授与されるとともに、今後受賞者が学業以外においても活動の場を広げ、人格形成および将来の礎とすることを祈念するとのお祝いの言葉があり、終始なごやかな雰囲気の中、閉会となりました。

(学生部学生支援課)



新教授紹介

中 道 正 之 (なかみち まさゆき)

大学院人間科学研究科



所 属：大学院人間科学研究科附属比較行動実験施設
専門分野：比較行動学、霊長類行動学、動物園行動学

【略歴】

- 昭54. 3 大阪大学人間科学部卒業
- 56. 3 大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻博士前期課程修了
- 59. 3 大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻博士後期課程単位取得退学
- 59. 4 日本学術振興会奨励研究員
- 61. 4 日本学術振興会特別研究員
- 62. 2 学術博士（大阪大学）
- 63. 4 大阪大学助手人間科学部
- 平 8. 8 大阪大学助教授人間科学部附属比較行動実験施設
- 13. 4 大阪大学助教授大学院人間科学研究科附属比較行動実験施設
- 16. 7 大阪大学大学院人間科学研究科附属比較行動実験施設長（平20.6まで）
- 19. 4 大阪大学准教授大学院人間科学研究科附属比較行動実験施設
- 19.12 大阪大学教授大学院人間科学研究科附属比較行動実験施設

下 田 吉 之 (しもだ よしゆき)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻共生エネルギーシステム学講座
専門分野：都市エネルギーシステム学

【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学工学部環境工学科卒業
- 62. 3 大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士前期課程修了
- 平 2. 3 大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士後期課程修了
- 2. 3 工学博士（大阪大学）
- 2. 4 大阪大学助手工学部
- 7. 4 大阪大学助教授先端科学技術共同研究センター
- 11. 7 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院工学研究科
- 19.12 大阪大学教授大学院工学研究科

矢 野 猛 (やの たける)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科機械工学専攻複合メカニクス講座
専門分野：流体力学

【略歴】

- 昭60. 3 京都大学工学部航空工学科卒業
- 62. 3 京都大学大学院工学研究科修士課程航空工学専攻修了
- 62. 4 北海道大学助手工学部
- 平 7. 3 博士（工学）（北海道大学）
- 9. 4 北海道大学助手大学院工学研究科
- 12. 4 北海道大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 北海道大学准教授大学院工学研究科
- 20. 1 大阪大学教授大学院工学研究科

新教授紹介

山 中 俊 夫 (やまなか としお)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科地球総合工学専攻建
築・都市デザイン学講座
専門分野：建築環境工学

【略歴】

- 昭57. 3 大阪大学工学部建築工学科卒業
- 59. 3 大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士前期課程修了
- 60. 3 大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程退学
- 60. 4 大阪大学助手工学部
- 平 6. 2 博士(工学) (大阪大学)
- 9.12 スウェーデン王立工科大学研究員
- 10. 4 大阪大学助手大学院工学研究科
- 10. 6 大阪大学講師大学院工学研究科
- 11. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院工学研究科
- 20. 1 大阪大学教授大学院工学研究科

田 中 秀 和 (たなか ひでかず)

産業科学研究所



所 属：産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジー
センターナノマテリアル・デバイス研究部門人工生
体情報ナノマテリアル分野
専門分野：ナノテクノロジー、機能材料科学、
物性物理学

【略歴】

- 平 5. 3 大阪大学工学部材料物性工学科卒業
- 7. 3 大阪大学大学院工学研究科材料物性工学専攻博士前期課程修了
- 7. 4 大阪大学大学院工学研究科材料物性工学専攻博士後期課程入学
- 8. 4 大阪大学大学院基礎工学研究科 物理系(物性分野) 専攻
博士後期課程(転研究科)
- 9. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科 物理系(物性分野) 専攻
博士後期課程退学
- 9. 4 大阪大学助手産業科学研究所
- 10. 9 博士(理学) (大阪大学)
- 13.11 科学技術振興機構 戦略創造推進事業個人研究型(さきがけ)
「ナノと物性」領域 研究員 兼務(平16.12まで)
- 15. 3 大阪大学助教授産業科学研究所
- 19. 4 大阪大学准教授産業科学研究所
- 20. 1 大阪大学教授産業科学研究所

田 中 学 (たなか まなぶ)

接合科学研究所



所 属：接合科学研究所加工システム研究部門
専門分野：溶接アーク物理、熱プラズマ応用

【略歴】

- 平 2. 3 大阪大学工学部溶接工学科卒業
- 4. 3 大阪大学大学院工学研究科前期課程溶接工学専攻修了
- 4. 4 大阪大学助手溶接工学研究所
- 8. 5 大阪大学助手接合科学研究所
- 12. 1 博士(工学) (大阪大学)
- 15. 4 大阪大学助教授接合科学研究所
- 19. 4 大阪大学准教授接合科学研究所
- 20. 2 大阪大学教授接合科学研究所

新教授紹介

正 城 敏 博 (まさき としひろ)

先端科学イノベーションセンター



所 属：先端科学イノベーションセンター
総合リエゾン・コーディネーション部門
専門分野：産学官連携、知的財産、ネットワーク、
LSI設計

【略歴】

- 平 5. 3 大阪大学工学部情報システム工学科卒業
- 7. 3 大阪大学大学院工学研究科情報システム工学専攻博士前期課程修了
- 9. 3 大阪大学大学院工学研究科情報システム工学専攻博士後期課程修了
- 9. 4 大阪大学助手大学院工学研究科
- 12. 5 大阪大学講師大学院工学研究科
- 14. 5 大阪大学助教授先端科学技術共同研究センター
- 16. 4 大阪大学助教授先端科学イノベーションセンター
- 19. 4 大阪大学准教授先端科学イノベーションセンター
- 20. 1 大阪大学教授先端科学イノベーションセンター

白 神 宏 之 (しらが ひろゆき)

レーザーエネルギー学研究センター



所 属：レーザーエネルギー学研究センター
パワーフォトンクス研究部門
専門分野：高出力レーザー応用、レーザー核融合、
プラズマ診断、レーザープラズマ理工学

【略歴】

- 昭54. 3 大阪大学工学部電気工学科卒業
- 56. 3 大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻博士前期課程修了
- 59. 3 大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻博士後期課程修了
- 59. 4 日本学術振興会特定領域奨励研究員
- 61. 4 日本学術振興会特別研究員
- 63. 4 大阪大学助手レーザー核融合研究センター
- 平12. 8 大阪大学助教授レーザー核融合学研究センター
- 16. 4 大阪大学助教授レーザーエネルギー学研究センター
- 19. 4 大阪大学准教授レーザーエネルギー学研究センター
- 20. 2 大阪大学教授レーザーエネルギー学研究センター

吉田敬義教授(医学系研究科) 逝去



医学系研究科教授吉田敬義先生は、病氣療養中のところ、11月10日(土)転移性大腸癌のため逝去されました。享年57歳の若さでした。

先生は、昭和49年順天堂大学大学院体育学研究科を修了、鶴見大学講師、同助教授を経て、昭和62年大阪大学健康体育部助教授、平成6年同教授、平成17年より医学系研究科教授をお務めになりました。

先生は、運動生理学ならびに体育学の教育研究に邁進され、特に、運動中の呼吸・循環機能の動態と調節メカニズムについて多角的かつ厳密な実験的検討を行い、いわゆる「持久力」がどのような生理機能特性を反映したものであるかを明らかにされました。なかでも、世界に先駆けて、

核磁気共鳴分光法により運動時の筋組織における循環応答とエネルギー代謝応答の関連を、秒単位の時間分解能で解析した研究は、運動生理学の分野に極めて大きな影響を与えました。また、国内の関連学会はもとよりアメリカスポーツ医学会、国際身体活動体力研究委員会などで指導的な役割を果たされました。

教育面では、全学共通教育において健康スポーツ教育科目を担当され、生涯を通じて健康を管理・維持する能力を向上するための実践的教育を行う科目「健康科学」、健康上の理由により通常の体育実技授業の履修を制限されている学生に対して、各人に応じた運動プログラムを提供する「健康処方」など、全国大学の健康スポーツ教育と比べても非常に先見性のあるユニークな授業に取り組まれました。また、大学院教育においては、基礎工学研究科および医学系研究科の学生に対し、運動負荷に対する筋組織の循環・代謝応答の性質について、定量的な生体計測実験研究を指導され、生理学研究のみならず、理論的研究や工学的応用など幅広い分野に人材を送り出されました。先生はご病気の逆境にあっても、ご自身の辛さを語られることはなく、常に周囲の人たちや学生に対して明るく励ましの言葉をかけておいででした。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学系研究科・医学部)

藤田英一名誉教授(基礎工学部) 逝去



本学名誉教授藤田英一先生は、12月1日(土)、急性心筋梗塞のため逝去されました。享年83歳でした。

先生は、海軍兵学校を経て、昭和25年東京大学第2工学部を卒業後直ちに東北大学金属材料研究所の助手となられ、その後、日本原子力研究所研究員、同研究所副主任研究員、米国ブルックヘブン国立原子力研究所物理部研究員を経て、昭和38年大阪大学基礎工学部教授(制御工学科制御工学第2講座担当)に就任され、平成元年3月停年退官されました。この間、本学の評議員、学生部長、附属超

高圧実験施設長を務められました。その後、静岡理工科大学設立委員、物質科学科教授および住友金属工業株式会社研究顧問を勤められました。

先生の金属物理学における業績は極めて広い範囲にわたりますが、格子欠陥における研究では、我が国における転位論の草分けとして電子顕微鏡による金属の変形、破壊の理論的研究で指導的役割を果たされ、材料の放射線損傷の研究ではパイオニア的役割を担われました。さらに、核物性的手法にいち早く注目され、金属物理学の研究に取り入れ新しい分野を開拓されました。先生は常に新しい研究手段を果敢に取り入れ、金属物理学の多くの分野で、例えば合金状態図の研究、格子欠陥の研究、相変態特にマルテンサイト変態の研究、金属中水素の問題などの研究で、新しく精緻な実験データを収集するとともに、既存の理論的解析法を用いるのではなく、独自の理論解析を展開され、常に新しい考え・知見を明らかにされました。

これらの業績に対し、日本金属学会学会賞など多くの賞を贈られるとともに、平成12年に本多記念会より本多記念賞、平成18年には瑞宝中綬章が授与されています。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

吉川 暲名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授吉川 暲先生は、12月23日(日)、奈良市の病院でご逝去されました。享年79歳でした。

先生は、昭和26年3月大阪大学工学部を卒業、同年4月同大学院特別研究奨学生となり、昭和31年3月同修了、同年4月大阪大学工学部助手となり、昭和36年9月同大

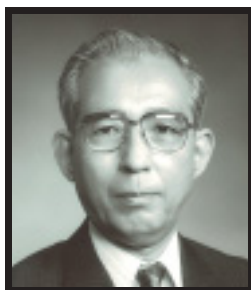
学工業教員養成所助教授、昭和40年4月同教授に就任、昭和44年2月同大学工学部に配置換となり、新設の環境工学科環境工学第四講座(空気浄化工学)を23年間にわたって担当されました。この間、わが国における空気調和衛生工学・空気浄化工学・大気環境工学とその関連の分野で広範囲かつ先駆的な研究を行い、その業績は国内・国外で高く評価されています。

学外においては、関連学会の理事、評議員を歴任するとともに、数多くの学会組織の運営に携わり、その発展に寄与されました。また、各種自治体の公害対策審議会委員等を長年にわたって務め、我が国の公害防止及び環境保全によりよい環境の創造に貢献されました。

囲碁・将棋をたしなみ、争いごとを嫌い、誰に対してもやさしく寛容であった吉川 暲先生のお人柄を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(工学研究科・工学部)

伊藤 博名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授伊藤 博先生は、1月5日(土)に逝去されました。享年85歳でした。

伊藤先生は、昭和20年9月大阪帝国大学理学部を卒業され、同年同月大阪帝国大学理学部副手となり、昭和24年6月文部教官に任命され大阪大学理学部に勤務、昭和26年4月大阪大学工学部助教授となられ、昭和29年8月から昭和30年6月までフルブライト留学生としてアメリカ合衆国イリノイ大学に滞在され、昭和36年1月大阪大学工学部教授に就任し、工学部超高温工学講座を担当されました。さらに、昭和42年6月に創設された工学部附属超高温理工学研究施設の施設長を併任され、昭和50年6月同研究施設高温発生研究部門教授に配置換の後、昭和61年3月停年退官され、平成7年3月まで福井工業大学教授(専任)を勤められました。

この間、先生は理論物理、情報工学、プラズマ・核融合

学の分野での研究・教育を進められ、我が国における当該分野の黎明期に先導的な役割を果たされ、また、我が国の核融合実用化研究開発に携わる指導者を育てられました。

学内においては、大阪大学原子力利用委員会委員、入学試験問題作成委員、学生生活委員会委員などを歴任され、また、基礎工学部創設に当たっては準備委員、大阪大学吹田キャンパス移転に当たっては、基本構想の立案推進への参画、さらに、核融合プラズマの基礎研究を本務とする工学部附属超高温理工学研究施設の創設により、本学の運営発展に貢献されました。

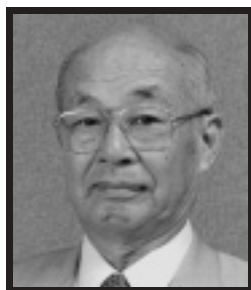
学外における大学に関連した活動としては、故岡田 實名誉教授(元大阪大学総長)、伏見康治名誉教授(元日本学術会議会長、元参議院議員)らとともに、核融合懇談会(現プラズマ・核融合学会)及び超高温研究会の設立に参加され、その後、日本学術会議原子力特別委員会委員、文部省学術審議会専門委員、文部省学術審議会専門員を歴任されるなど、大学における核融合研究の推進に寄与されました。

これ以外では、原子力委員会専門委員、日本原子力研究所核融合研究委員会委員として、科学技術庁傘下の核融合の推進に貢献され、また、関西学術都市調査懇談会、次いで、関西文化学術研究都市推進協議会のメンバーとして関西文化学術研究都市建設推進促進法の実現と発展に貢献され、平成11年には勲三等旭日中綬章を受けられました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(工学研究科・工学部)

岡田善雄名誉教授(細胞工学センター)逝去



本学名誉教授岡田善雄先生は、1月16日(水)早朝、急逝されました。享年79歳でした。

先生は、昭和27年3月大阪大学医学部を卒業、同大学附属病院で実地修練後、昭和28年7月微生物病研究所防疫学部助手に採用され、昭和37年4月同研究所助教授、昭和48年10月同研究所教授、昭和57年4月大阪大学細胞工学センター(現大学院生命機能研究科)の新設に伴い同センター教授に就任し、昭和57年4月から昭和62年3月まで同センター長としてその運営に尽力されました。平成3年3月大阪大学を停年により退官され、同年4月大阪大

学名誉教授の称号を授与されました。大阪大学退官後は、財団法人千里ライフサイエンス振興財団理事長に就任され、平成19年3月に理事長を辞して後も、顧問として生命科学に関する学術・産業の発展に尽力されました。

先生は、HVJ(Hemagglutinating virus of Japan 別名：センドアイウイルス)による動物細胞融合現象を世界に先駆けて発見され、さらに細胞融合を基礎とする体細胞遺伝学、細胞工学と呼ばれる新しい学問分野を開拓され、今日のバイオサイエンス隆盛の礎を確立されました。これらの功績により昭和47年1月朝日賞、昭和50年11月武田医学賞、昭和54年6月藤原賞、昭和55年6月日本学士院恩賜賞・学士院賞、昭和57年11月文化功労者、昭和62年11月には卓絶なる研究功績「細胞融合」により文化勲章を授与され、平成5年12月日本学士院会員、平成10年11月大阪文化賞を受賞されました。また、平成12年春には勲一等瑞宝章が授与されています。

先生はいつも穏やかな語り口で話されましたが、研究について「生き物というのはいかにすごいものか、それを自然と対話しながら教えてもらう」と常に話して下さいましたお姿を忘れることはできません。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(生命機能研究科)

阪大関係資料寄贈のお願い

2006年7月に設置された文書館設置準備室では、近い将来に本格的な文書館設置を目指して、大阪大学（旧制の前身学校を含みます）の歴史に関する資料の収集・整理・保存活動を行っています。

文書館の設置目的は、(1) 現用期限が過ぎた法人文書中、アーカイブズとして保存すべきものを選別し、整理・保存・公開すること、および(2) 大阪大学に関するそのほかの歴史的資料を収集・整理・保存・公開することの2点を柱とします。(1)の法人文書については、事務局をはじめとする各部局から文書館に移管するシステムを構築すべく検討しています。皆様にご協力をお願いしたいのは、(2)の大阪大学に関する歴史的資料の収集についてです。これには、本学が発行した刊行物（研究紀要を除く）や歴代の総長や教職員の書翰・書類・メモ類、講義ノート、学生運動に関係するビラ、機関紙、学生生活に関係する資料などがあります。

広報誌・シラバスや各種報告書等、本学が発行した刊行物は、本学の動向についての確に伝える機能を有しています。各部局からも御寄贈いただいておりますが、これまでに刊行されたものの全てを網羅するには到っておりません。委員会等の議事録は法人文書として保存されていますが、法人文書は議題と結論しか記載されていないことが多く、審議の経過を明らかにすることは困難です。出席した委員の方が記したメモは、法人文書を補完するものとして非常に重要です。

上記の大阪大学の歴史に関する資料をお持ちの方におかれましては、文書館設置準備室に御寄贈もしくは御貸与いただけますよう、お願いいたします。

【連絡先】

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-32

大阪大学サイバーメディアセンター気付

大阪大学文書館設置準備室

Tel: 06-6850-6269 Fax: 06-6850-6274

E-mail: kan@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/archives/top.html>



(文書館設置準備室)

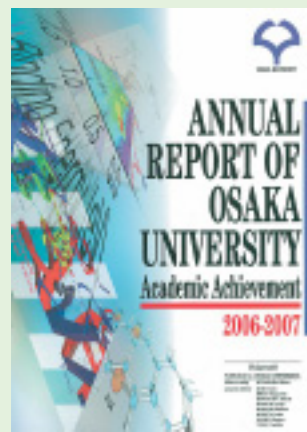
「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY -Academic Achievement- 2006-2007」刊行

本学の優れた研究成果を国内外に発信する英文研究広報誌「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY-Academic Achievement- 2006-2007」を、平成19年12月に刊行しました。平成12年の創刊から第8巻目となり、応募論文のうち、人文・社会系、理学系、工学系、及び生物系の各分野から選ばれた論文100編を掲載しています。その中でも特に優れた論文として論文10選、視覚的に読者の興味・関心を惹きつける論文としてグラフィックス24選を取り上げています。

教員の方にはすでに1部ずつ配布しておりますが、追加を希望される場合は所属部局の事務部又は国際部国際連携課国際連携係（内線9572）までお知らせ下さい。

また、今月から第9巻の掲載論文を募集しています。応募方法等については本学ホームページ（大阪大学ポータル内「事務局からのお知らせ」）等でお知らせしておりますので、奮ってご応募下さい。

(国際部国際連携課)



平成19年度卒業式及び大学院学位記授与式

平成19年度卒業式及び大学院学位記授与式を下記のとおり挙ります。

○卒業式

日 時：平成20年3月24日(月)

本年度は2部構成になりましたので、所属学部により時間帯をご確認願います。

1部【文学部、人間科学部、外国語学部、法学部、経済学部、理学部】

10時00分～11時10分 <11時20分～11時50分>

[9時00分 入場開始]

2部【医学部、歯学部、薬学部、工学部、基礎工学部】

13時00分～14時10分 <14時20分～14時50分>

[12時00分 入場開始]

※ < > 内は総長主催祝賀会(雨天の場合は中止)

場 所：[卒業生] 大阪大学吹田地区体育館

[保護者] 大阪大学コンベンションセンター(映像配信)

○大学院学位記授与式

日 時：平成20年3月25日(火)

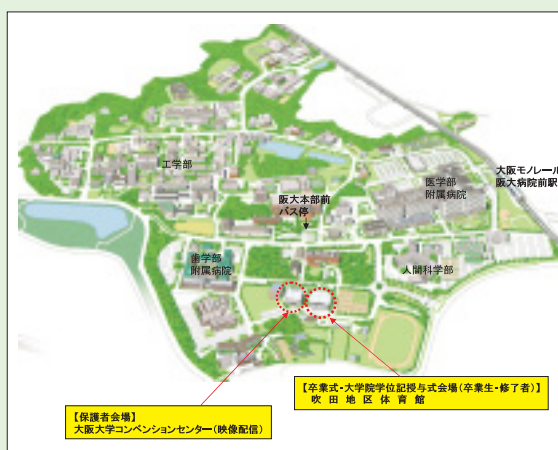
10時00分～11時00分 <11時10分～11時40分>

[9時00分 入場開始]

※ < > 内は総長主催祝賀会(雨天の場合は中止)

場 所：[修了者] 大阪大学吹田地区体育館

[保護者] 大阪大学コンベンションセンター(映像配信)



【それぞれ、開始15分前までに入場完了願います。遅刻された場合、式場への入場をお断りする場合がありますのでご注意ください。】

保護者の方は、吹田地区体育館に隣接するコンベンションセンターにおいて、卒業式及び大学院学位記授与式を映像でご覧いただくことになりますので、予めご承知の程よろしくお願いいたします。また、会場の収容人数の都合上、多数でのご参加はお控えいただくようお願いいたします。

※車での来場はご遠慮下さい。

〈問い合わせ先〉 総務部総務課総務係 TEL：06-6879-7014

国立大学法人等職員統一採用試験のお知らせ

近畿地区国立大学法人等職員統一採用試験の試験案内の配布が始まりました。

受 験 資 格： 昭和54年4月2日以降に生まれた者

受 付 期 間： 4月1日(火)～4月10日(木)

第一次試験日： 5月18日(日)

詳しくは下記の事務室にお問い合わせください。

近畿地区国立大学法人等職員統一採用試験事務室

住所：京都市左京区吉田本町(京都大学内)

電話：075-753-2227～2230

メールアドレス：shiken@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

記念講義

平成20年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
理学研究科 （宇宙地球科学専攻 極限物質学講座）	徳 永 史 生	3月14日（金）16:00～17:30 理学研究科D501号室	宇宙・地球・生物と情報
理学研究科 （数学専攻解析学講座）	小 谷 眞 一	3月18日（火）16:00～17:00 理学研究科D501号室	私の大学生活を振り返って
医学系研究科 （内科系臨床医学専攻内科 学講座（循環器内科学））	堀 正 二	3月13日（木）15:00～16:30 医学部A講堂	循環器病学におけるIntegrated Medicine をめざして
工学研究科 （ビジネスエンジニアリング専攻 テクノロジーデザイン講座）	座 古 勝	3月5日（水）15:00～16:30 附属図書館吹田分館3階 視聴覚ホール	複合材料への道案 ー力学的特性評価とシミュレーションー
工学研究科 （地球総合工学専攻船舶 工学講座）	矢 尾 哲 也	3月7日（金）13:30～15:00 附属図書館吹田分館3階 視聴覚ホール	船体構造の座屈・最終強度に関する 研究
工学研究科 （マテリアル生産科学専攻 構造機能制御学講座）	馬 越 佑 吉	3月21日（金）15:30～17:00 工学研究科材料系棟 岡田メモリアルホール	材料の密林の開拓 ー転位の振る舞いから骨再生までー

平成20年度懐徳堂古典講座“基本コース”

【基本Aコース】会場：大阪大学中之島センター

- | | |
|-----------------|------------------------|
| コース名 | （講師名） |
| A-1 源氏物語を読む | （大阪大学大学院文学研究科准教授 加藤洋介） |
| A-2 江戸時代の触留帳を読む | （大阪大学大学院文学研究科教授 村田路人） |
| A-3 世阿弥の生涯を読む | （大阪大学大学院文学研究科教授 天野文雄） |
| A-4 小津安二郎の映画を読む | （大阪大学大学院文学研究科教授 上倉庸敬） |

【基本Bコース】会場：大阪市立総合生涯学習センター

- | | |
|--------------|-------------------------|
| B-1 老子・莊子を読む | （愛知教育大学・皇學館大学名誉教授 野村茂夫） |
|--------------|-------------------------|

【基本Cコース】会場：大阪市立総合生涯学習センター

- | | |
|------------------|--------------------|
| C-1 中国の歴史記録を読み解く | （桃山学院大学文学部教授 串田久治） |
| C-2 文人・儒者の書画と書論 | （元京都女子大学教授 大野修作） |

※各コースの開催日時、内容等につきましては、懐徳堂記念会事務局までお問い合わせ下さい。
（ホームページ等にも掲載しております）

集中コース・特別コースにつきましては、4月頃にお知らせする予定です。

● 受講料

- 全8回分 16,000円（一般）
10,000円（会員・別途年度会費3,000円必要）

※受講料は半期単位での納入も可能

● お申込方法

下記の懐徳堂記念会事務局まで御連絡ください。
電話・ハガキ・FAX・メール何でも結構です。

● お問い合わせ先：（財）懐徳堂記念会事務局

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部内
Tel：06-6843-4830、Fax：06-6843-4850
E-mail：kaitokudo@let.osaka-u.ac.jp <http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitokudo/>

（懐徳堂記念会）



天文同好会

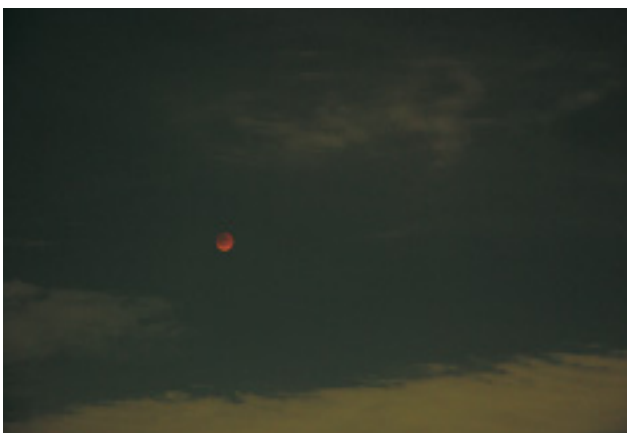
「君は満天の星空を見たか」

昔から人々は星を愛し、親しんできました。美しい星空に包まれて幻想的な気分になったり、星々を動物等に見立てて楽しんだり、様々な方法で人間は星と関わってきました。街いっばいに広がる光によって満天のすばらしい星々を見ることが困難になった今でも、人々の星に対する愛情、好奇心は尽きることはありません。そんな星空に夢をえがく人たちが集ったのが我々天文同好会です。



月

私たちの活動の中心は何といっても星を見ることです。学内で星を眺めたり、近くの観測地に行って観測を行っています。観測では、様々な種類の望遠鏡や双眼鏡を用いて銀河等を見る人もいれば、星の写真を撮る人、壮大な星空に思いを馳せる人など、皆様々な楽しみ方をしています。どんな方法であっても、皆で共に夜空の星を眺めて一夜を過ごすことができるというのは、大きな喜びであると思います。自分で星座を見つける事ができた時や、望遠鏡の視野に目標としていた星を入れることができた時の感



皆既月食



白鳥座

動は言葉にできません。また、私たちの活動は夜だけにとどまりません。昼間には太陽を観測したり、皆で協力してプラネタリウムを作ったりもしています。

また、外部との交流も盛んです。例えば、関西の大学の天文系の部活で構成されている「KSSN - Kansai Student Star Network -」という団体に加盟しており、有志で他大学の方々と観測会、交流会を行ったりしています。京都で開催される「星を求めて」という天文行事にも積極的に参加しています。

部員は皆、星が好きだという共通点を持っており、そのような仲間と美しい星空を共有できる事が天文同好会の一歩の魅力であり、喜びなのだと思います。

部長 多田幸平 (理学部1年)

〈コメント〉

一緒に星を見ましょう。



練習場所：星が見えるところならどこでも

練習日時：星が見えるときならいつでも

部員数：37人 (院生以上も含めると68人)

連絡先：井上文彰 (副部長)

nratok-ysk_9.80665@softbank.ne.jp

基礎工学部からダンスの世界へ転進

夢のある会社 それがダンスだった



早崎 正剛 Masataka Hayasaki

大阪大学基礎工学部情報科学科（平成14年度卒業）

在学中、大阪大学舞踏研究会に所属

卒業後、ダンス教室でステップを教える傍らプロとして世界の頂点を目指す

身体ひとつを武器として、ダンスの世界でプロとして生きる

Q. ダンスを始められたきっかけは？

双子の兄が1年早く大学に入り、ダンスを始めていました。その兄が家のなかで一人で踊っているのを見て、興味を持つようになっていました。その後、大阪大学に進学しダンス部の当時4回生だった先輩の踊りをみて惚れました。

Q. 学業との両立は大変でしたか？

1・2回生のときは授業後クラブ練習に行っていました。3回生になり、関西大会でベスト6に入賞するようになると、クラブ中心の生活が始まりました。おかげで大学を6年間通わせていただきました(笑)。

Q. 研究は何をされていたのですか？

研究内容は、最短経路探索に関するアルゴリズムについてでした。カーナビなどで利用されているものですね。紙にむかっていろいろな式を書くことが多かったです。

Q. プロを意識し始めたのは？

やはり双子の兄の「俺プロになるわ。」の一言からです。そんな選択もあるのかと思い、じわじわとプロを意識するようになりました。

Q. サークルとプロ(社会人)の違いは？

サークルでは踊れても踊れなくても自己満足の範囲ですみます。しかし、プロは成績がそのまま仕事につながります。勝つこと、それはすなわち生きていくことです。「勝てたらいい」ではなく「絶対に勝つ」、上手になると決意し練習します。サークルとプロは生活がかかっているか、いなかの違いではないでしょうか。

Q. ダンス教室をされていると伺いましたが、どんなお仕事ですか？また、ご自身の練習は？

基本は社交ダンス愛好家の皆さんへのレッスンです。その他には競技に出場している選手を指導したり、学生に教えたりしています。それが21時から22時に終わるので、それから自分の練習を2・3時間しています。

Q. 小さい頃の夢と現在の10年後の夢は？

小さい頃は2歳の時から始めていた日本舞踊の世界で生きていくことでした。まあ踊るという点では一緒ですね。10年後は世界で活躍して日本のダンス界のために役立てるようになりたいと思っています。

Q. 最後に、就職活動で奮闘している在学生へ一言

就職活動は本当に大変です。だからこそ、夢をもって望んでください。

私も一般会社の就職活動をしていましたが、その中で夢のある会社というのがダンスだったのです。皆さんの夢をもう一度見つめなおし、その夢を叶えられる企業にどうしたら入社できるかということを、じっくり考えてみてはいかがでしょうか。頑張ってください。

大阪大学舞踏研究会 後輩の活躍

秋季関西学生競技ダンス選手権大会

ラテン・フォーメーションの部

2007年11月18日(大阪大学体育館)



ラテンの部では吉田真子(工学部応用自然科学科)・田中康博(人間科学部人間科学科)組が、サンバとチャチャの2部門で1位、個人総合優勝を果たしました。



「学業との両立は大変でした。でも、ダンスがあったからこそ研究にも集中でき、それ以外の時間をダンス練習にあてることができたんだと思います。(吉田)」



フォーメーションの部で踊る、大阪大学舞踏研究会の8組のペアの皆さん。会場はますます盛り上がります。

夢を現実にした先輩がここにいます。夢は、願ひ続ければ必ず叶う。一生の仕事だからこそ、自分の夢を再確認して、いよいよ本格化する就職活動に臨んでほしいと思います。

(TA: 持丸、河股、岡田)

今号も、TAの皆さんの企画によって取材から編集までを行っていただきました。自分の夢に向かって生きる先輩の姿は、彼らにとっても、非常に刺激的なものでした。

私の世界は広がってきました

言語文化研究科研究生 梶岡・ナルドン レオナルド (ブラジル)



■ 自己紹介

初めまして！私は梶岡・ナルドンレオナルドと申します。ブラジルから来ました。大阪大学大学院言語文化研究科の研究生です。お母さんは日系ブラジル人、お父さんはイタリア系ブラジル人です。2006年に日本青年国際交流機構の「世界青年の船」のプログラムに選ばれ、参加するために日本に来ました。この時、日本と他の12ヶ国の青年に会い、私は国際交流の興味を広げました。



「世界青年の船」というのは国際交流を促進するため、日本の内閣府が提供している事業です。これは、日本の青年約120名と訪問国を含む世界12か国の青年約140名が、「にっぽん丸」という船に乗って、様々なディスカッションをベースとしたプログラムを行うものです。乗船期間は約43日間で、船内では共同生活をして、寄港地では様々な研究をします。「世界青年の船」の参加者は、日本で出航研修や地方プログラムや表敬訪問などをした後、私達の場合は、日本、シンガポール、インド、ケニア、モーリシャスを訪問しました。2006年の年末には、世界青年の船のリユニオンのため、1週間バーレーンを訪問しました。



様々な国民や宗教や文化などを知ることができ、私の世界が広がりました。

■ 母語

私と同様、様々な国籍が混ざりあった国民性の成立は、ブラジルで生まれた人の大半の特徴です。そのため、ブラジルの国民像を特定することは難しいと言われています。ブラジルはポルトガル人に発見されましたので、ブラジルの国語はポルトガル語です。しかし、自然資源が多くて広い国なので、他のヨーロッパの国から注目されました。特に南米の大半を発見したスペインとフランスとオランダにです。

そのため、ブラジルの文化や言語などに、様々な国からの影響が与えられました。ブラジルのポルトガル語はスペイン語に似ていますので、あるブラジル人は、スペイン語はできないのに、スペイン語が話せます。さらに、ポルトガル語の中で英語、フランス語、ドイツ語の外来語も使います。

■ 阪大の研究生の生活

去年の4月に日本に到着して、そのときから、大阪大学の生活を体験しています。阪大の生活はブラジルの大学と非常に異なっていますが、到着した後2週間ですぐに慣れました。これは、言語文化研究科の先生や同級生や大阪大学留学生センターの皆さんやホスト・ファミリーのおかげです。日本の生活でのカルチャーショックもありませんでしたので、日本の生活はとても楽しいです。今後、ブラジルに帰ったら、日本で知り合った多くの人々と会うことができなくなりますので、寂しくなると思います。



私、私の夢と将来

基礎工学部2年 ヴィシャル・ソーム (インド)



■ 昔々、ある所に……

1:

父:「アー、いい天気だね。ニュースが来た?」

友達:「いや、まだだよ。」

オギャア、オギャア。

父:「赤ちゃんの声が聞こえるよ。私はお父さんになったよ、パパになった。」



子供が生まれた。家族は幸せで心がいっぱいだった。今までの中で、一番いい幸せな雰囲気だった。恐らく、これは、最高の幸せだと言えよう。(実は、これは、二回目で初めて幸せになった。遂に得た。)

2:

父:「学校が始まったね。学校はどう?」

子供:「楽しいよ、お父さん。学校に毎日行きたいよ。」

父:「アー、そう。よかったね。友達ができたでしょう。友達と勉強して、遊んで、楽しいだろうね。」

母:「年上の人に礼儀正しくしなければいけないのよ。わかった? ……」

多分、このようにして本当の学習が始まる。家族も、学校も、子供をどんな人間にでもすることができる。子供をいい人間で成功が出来る人間にすることも出来るだろう。でも、こんな場合に於いて、時には競争し、時には助け合う、大切な友達の存在を忘れてしまわないだろうか。けれども、友達さえも、悪い友達のせいで悪い…になってしまわないか。その時は、二回目でもどうにもできない事になってしまうだろう。



3:

父:「高校に入ったね。勉強は大丈夫? 頑張っているでしょう。」

子供:「はいお父さん。勉強は大丈夫。頑張っている。」

(頑張っているけど、そんな頑張りで十分だろうか? あるいは、本当に頑張っている?)

皆は頑張りたいが殆どそうしない。どうしてだろうか? 誰が止めたのだろうか?

父:「来月は将来のため大切だね。頑張てね。」

母:「そうよ。頑張てね。」

子供:「はい、もっと頑張るよ。」

(本当? ……多分ね……)

子供:「ほとんどできたけど、大好きなのは…アー…もうすこし…」

親:「じゃあ、いいね。殆ど出来たでしょう。もうちょっと頑張ったらよかったね。」

できなかった。しかしそれは、世界の終わりじゃないだろう。全てのものには表と裏がある。頑張ることは大切だ。誰にでも、二回目がある。頑張れば、結果は、後からついてくる。



「アー、やった。二回目で。」

■ 将来の夢と将来

上の説明はちょっと複雑で分かりにくいと思いますが、これは私です。自分にとっては家族が世界一大切で、父母に指導されたように自分のことを信じて、いつも自身を持って生きて行きたいです。今は阪大の基礎工のエレコースの二年生で勉強も頑張って、友達と色々遊んで満足な生活を送っています。

将来は大学院に進んで、また研究等やりたいのです。母国インドはコンピュータの分野で世界一と言われていますが、電気電子の分野も日本みたいに世界一に出来るよう、日本で色々学習してまたインドに帰って科学技術革新に貢献したいと考えています。

将来は、電気電子に関する会社で自分の研究を続け世界の人たちのため役立つことをやりたいです。せっかく、きっかけもある程度あるので、将来インドと日本の関係をより良くするための掛け橋になれば嬉しいです。取り敢えず、日本で留学している間に切磋琢磨を出来るだけして、粉雪のように皆の顔を笑顔にしたいのです。

イエーテボリ大学 (スウェーデン)

(University of Gothenburg)



GÖTEBORG UNIVERSITY



イエーテボリ大学は、スウェーデン第二の都市イエーテボリに位置し、10 学部、57 専攻学科、学生数 5 万人、教職員 5 千人を擁する北欧最大の大学です。1891 年に単科大学として設立され、初期は人文系を主とした哲学部（人文学、社会科学、一部の自然科学）が中心でしたが、1949 年に医学部が加わり、50 年代半ばに総合大学となりました。

スウェーデンでは比較的新しい大学ですが、歴代の学長には日本でも有名な中国語学・方言学の泰斗 B. カールグレン博士や、インド・ヨーロッパ語歴史比較文法・古典

ギリシア語学の Hj. フリスク博士、歴史学の C. ヴェイブル博士などがおり、人文学系分野はもちろんのこと、医学、歯学の分野においても世界的に優れた研究を行っています。

イエーテボリ大学には、東洋・アフリカ諸語学科のもとに日本語専攻があり、日本への関心も高く、2005 年 1 月に大阪外国語大学との学術交流協定が締結されました。以来、交換留学による学生の受入れと派遣、言語教育や地域研究を中心に交流を行ってききましたが、大阪大学との統合を機に、2007 年 10 月 1 日付で大阪大学としての大学間学術交流協定となりました。

これにより、今後は交流の幅が拡大し、幅広い分野にわたって、学生交流や研究交流が行われることが期待されます。



ホームページ : <http://www.gu.se/>

編集後記

2 月に入り、キャンパスも雪化粧という日がありました。大阪大学を目指す受験生にとっても試験本番を迎えます。万全の体調で希望をかなえてもらいたいと願います。

今号では、TA の学生達が CSCD の取り組みについて企画から取材、編集を行い、心斎橋で行われた「知デリ」に参加し、先生方にも指導を仰ぎながら記事を作成しました。このイベントも学生自らが積極的に運営に携わり活動しています。先生方からも、TA による活動は同様に非常に有意義であり、最もセルフラーニングの場足りうると言っていただきました。これまで知らなかった大学の様々なことに積極的に関心を持って、いろいろと提案をしてくれる姿は非常に頼もしく思われます。

(野瀬)

保健学科エントランスホールに鯉が群れる



このたび、医学系研究科保健学専攻の別府慎太郎教授から、「群鯉」の六曲一双の屏風仕立ての絵画が寄贈され、保健学科のエントランスホールに設置されました。作者は、山泉の名で山水画、陶芸など数多くの作品を残した山岡千太郎氏です。

エントランスホールは美術館を思わせる雰囲気となり、鯉が群れ泳ぐ雄大な様子に、通り過ぎる学生、教職員、来客者も足をとめ絵画に見入っていました。

なお、別府教授からは、寄贈に際し、次の文書が添えられました。

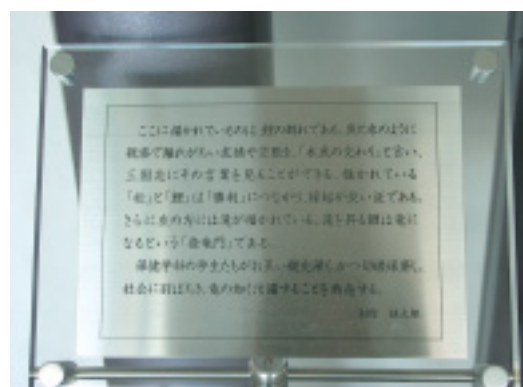
「ここに描かれているのは、鯉の群れである。魚と水のように親密で離れがたい友情や交際を「水魚の交わり」と言い、三国志にその言葉を見ることができる。描かれている「松」と「鯉」は「勝利」につながり、縁起が良い証である。さらに左の方には滝が描かれている。滝を昇る鯉は竜になるという「登竜門」である。

保健学科の学生たちがお互い親交深く、かつ切磋琢磨し、社会に羽ばたき、竜の如く活躍することを祈念する。」

(医学系研究科・医学部)



「群鯉」の前で(別府教授(左)と大和谷 厚保健学科長(右))



“ ㇿびす男 ” ㇿび@阪大坂2008開催



1月10日(木)、豊中キャンパスの阪大坂で、今年一番石橋で福のある男女を決定する「ㇿびす男」ㇿび@阪大坂2008」が開催されました。

このイベントは、今年一年の「石橋商店街の商売繁盛」と「地域と阪大のより良い交流」を願って、石橋商店街を研究対象とする大学院経済学研究科の松村真宏研究室と石橋商店街が協力し、昨年度から実施しています。石橋商店街は、阪大生にとって通学や生活で身近な商店街ですが、お互い深く関わる機会がありません。そこで、阪大と石橋商店街との交流の場を育てていこうと企画されたものです。

当日は53名の参加者があり、午前7時30分のスタートの合図と同時に一斉に阪大坂を駆け上がる姿は壮観でした。その後に行われた参加者と商店街との交流会では、商店主から参加者へ豚汁やお茶が振舞われ、商店街の商品やお買い物券などが当たる抽選会も行われました。

2年目となる今回は、昨年に引き続いてイベントに参加された方もおり、そのような参加者が商店主と会話している光景もみられ交流の深まりを感じることができました。来年もこのイベントを続けると共に、様々な交流の場を創り出していきたいと考えています。

(ㇿびす男ㇿび実行委員会)



阪大 NOW No.102 2008 2月号

2008年2月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1
TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7166
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp